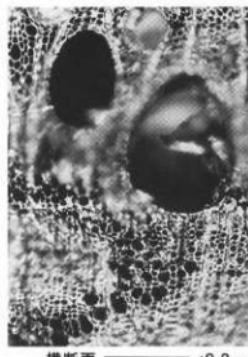


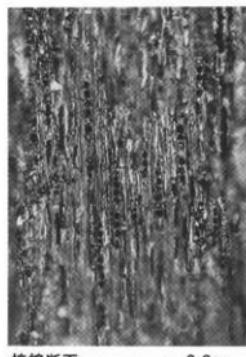
杉木原遺跡 出土炭化材の顕微鏡写真



横断面 :0.2mm
1. 炭化材 SI-30 クリ



放射断面 :0.2mm



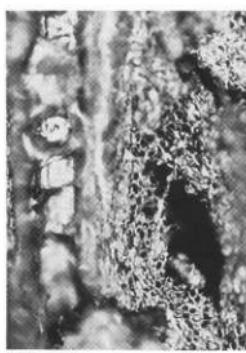
接線断面 :0.2mm



横断面 :0.2mm
1. 炭化材 SI-20 コナラ属コナラ節



放射断面 :0.2mm



接線断面 :0.2mm

IV. 杉木原遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987）。

2. 試料

調査地点は、第1地点、第2地点、第3地点、第4地点、第5地点の5地点である。試料は、鬼界アカホヤ火山灰（K-A h）より下位層について計22点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスピーブ添加（直径約40μm・約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヒエ属型（ヒエ）の換算係数は8.40、スキ属型（スキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図5に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：ヒエ属型、キビ族型、スキ属型（スキ属など）、ウシクサ族、ウシクサ族（大型）、シバ属、Bタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキユウチク節、ヤダケ属）、タケ亜科（未分類等）
その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、はめ縫パズル状（ブナ科ブナ属など）、Aタイプ、その他

（2）植物珪酸体の検出状況

1) 第1地点（図1）

鬼界アカホヤ火山灰（K-A h）直下層（試料0）から始良入戸火碎流堆積物（A-I t o）の上層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、A-I t o上層（試料8）では、ネザサ節型やクマザサ属型、棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である。霧島小林軽石（K r-K b）の下層（試料7）では、クマザサ属型や棒状珪酸体が大幅に増加しており、スキ属型やウシクサ族も検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。

K r-K b混層（試料6）ではクマザサ属型が減少傾向を示し、ウシクサ族がやや増加している。K r-K bの上層（試料5）から嫁坂軽石（Y m）の下層（試料2）にかけても、おおむね同様の結果であるが、試料2ではスキ属型やウシクサ族が増加し、メダケ節型も検出された。

Y m混層（試料1）ではネザサ節型が増加傾向を示し、ヒエ属なども検出された。ヒエ属型には栽培種のヒエが含まれるが、現時点では栽培種とイヌヒエなどの野生種とを完全に識別するには至っていない（杉山ほか、1988）。これは、植物分類上でも両者の差異が不明確なためである。K-A h直下層（試料0）では照葉樹林の主要な要素であるブナ科（シイ属）が出現している。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、K r-K bの下層から上層にかけてはクマザサ属型が卓越しており、Y m混層およびその下層ではスキ属型が優勢となっていることが分かる。

2) 第2地点（図2）

K-A h直下層（試料1）からY mの下層（試料4）までの層準について分析を行った。その結果、Y mの下層（試料4）ではクマザサ属型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族も比較的多く検出された。また、スキ属型やネザサ節型なども検出された。Y m混層（試料2, 3）ではクマザサ属型が減少し、K-A h直下層（試料1）ではネザサ節型が増加している。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、Y mの下層ではクマザサ属型が卓越しており、

Ym混層にかけてはススキ属型が多くなっていることが分かる。

3) 第3地点(図3)

K-A h直下層(試料1)からYmの下層(試料4)までの層準について分析を行った。その結果、全体的に棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族やクマザサ属型も比較的多く検出された。また、キビ族型やススキ属型、ネザサ節型なども検出された。

おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、全体的にクマザサ属型が卓越していることが分かる。

4) 第4地点(図4)

K-A h直下層(試料1)およびYm混層(試料2)について分析を行った。その結果、Ym混層(試料2)では、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族やクマザサ属型も比較的多く検出された。また、ススキ属型やネザサ節型なども検出された。K-A h直下層(試料1)ではクマザサ属型が減少し、ススキ属型やウシクサ族、ネザサ節型がやや増加している。

おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、Ym混層ではクマザサ属型が卓越していることが分かる。

5) 第5地点(図5)

K-A h直下層(試料1)からYm直下層(試料3)までの層準について分析を行った。その結果、Ym直下層(試料3)では棒状珪酸体が多量に検出され、クマザサ属型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族、ネザサ節型なども検出された。Ym混層(試料2)ではウシクサ族が増加し、メダケ節型が出現している。K-A h直下層(試料1)ではクマザサ属型が減少し、ネザサ節型が大幅に増加している。

おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、Ym混層より下位ではクマザサ属型が卓越しており、K-A h直下層ではネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生・環境

以上の結果から、杉木原遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

始良戸火碎流堆積物(A-I to, 約2.4-2.5万年前)の上層の堆積当時は、ネザサ節やクマザサ属は少量見られるものの、何らかの原因でそれ以外のイネ科植物の生育にはあまり適しない環境であったものと推定される。その後、霧島小林軽石(Kr-Kb, 約1.4-1.6万年前)の下層の堆積当時には、クマザサ属などのササ類を主体とするイネ科植生が成立したものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節とクマザサ属は一般に相反する出現傾向を示し、前者は温暖の、後者は寒冷の指標となっている。ここでは、クマザサ属が圧倒的に卓越していることから、当時は寒冷な気候条件下で推移したものと推定される。クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動

をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻、1992）。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

嫁坂軽石（Ym）の下層では、クマザサ属がしだいに減少し、ススキ属やチガヤ属、ウシクサ族などが増加したものと考えられる。また、鬼界アカホヤ火山灰（K-A h、約6,300年前）直下層では、第5地点周辺を中心にネザサ節が大幅に増加したものと推定される。この植生変化は、後氷期における気候温暖化に対応しているものと考えられる（杉山・早田、1996）。また、ススキ属やチガヤ属、ネザサ節は日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

なお、鬼界アカホヤ火山灰直下層では、第1地点周辺など調査区の一部でブナ科（シイ属）などの照葉樹が見られたものと推定される。花粉分析の結果によると、九州の太平洋沿岸部では鬼界アカホヤ火山灰の堆積以前にはシイ林を中心とする照葉樹林が成立していたとされており（松下、1992）、今回の結果はこれと符合しているといえる。今後、周辺地域で同様の検討を行うことにより、照葉樹林の存在や分布拡大の様相が解明されるものと期待される。

参考文献

- 佐瀬隆・細野衛・宇津川徹・加藤定男・駒村正治（1987）武藏野台地成層における関東ローム層の植物珪酸体分析、第四紀研究、26, p. 1-11.
- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点、植生史研究、第2号, p. 27-37.
- 杉山真二（1987）タケ亞科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、第31号, p. 70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—、考古学と自然科学、20, p. 81-92.
- 杉山真二・早田勉（1994）植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定（第2報）—九州南部の台地上における照葉樹林の分布拡大の様相—、日本文化財科学会 第11回大会研究発表要旨集, p. 53-54.
- 杉山真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定—中期更新世以降の氷期—間氷期サイクルの検討—、日本第四紀学会 講演要旨集、26, p. 68-69.
- 高槻成紀（1992）北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—、どうぶつ社.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9, p. 15-29.

表 1 杉木原木部 植物組織分析結果
検出密度 (単位: ×100個/mm²)

分類群	試料	第1地点				第2地点				第3地点				第4地点				第5地点					
		0	1	2	4	5	6	7	8	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4		
イネ科		8								7	15	15	15	7	30	15	24	21	14	35	27	7	
ヒエ属型		23	15	8	15	15	15	7	7	51	45	31	31	7	37	15	24	57	23	35	27	7	
キビ属型		7	53	80	8	15	15	7	51	198	136	140	121	148	84	102	156	115	155	150	67	67	
ススキ属型		15	114	249	70	69	77	22	51														
ウシクサ属(大型)					7																		
シバ属																							
Bタイプ		8																					
タケ亜科																							
ネササ属型		22	61	22	8	7	15	81	29	8	8	14	15	8	43	23	23	41	41	41	41	7	
クマササ属型		7	61	124	132	123	223	434	46	118	81	76	265	182	118	182	141	141	147	254	78	171	166
メダケ属型		7	38	154	116	31	139	232	8	257	139	60	148	178	111	15	39	7	21	14	21	14	
未分類等																							
その他イネ科																							
表皮毛冠層		311	614	426	408	593	591	46	463	667	559	530	570	585	483	487	533	646	861	581	588		
伴状毛冠層																							
茎部起層		22	424	585	387	339	462	59	76	426	491	408	476	534	518	537	526	533	538	713	547	409	
未分類等																							
地下部																							
ブナ科(シノ属)		7																					
はめめバズル属(ブナ属など)																							
Aタイプ		8																					
その他の (海綿骨材)																							
植物組織分析値		90	1107	1872	1154	986	1533	1819	190	1418	1685	1322	1638	1659	1657	1313	1366	1592	1792	2702	1772	1362	
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ³)																							
ヒエ属型		0.64																					
スキ属型		0.09	0.66	1.00	0.10	0.19	0.09	0.09	0.64	0.56	0.39	0.09	0.46	0.19	0.29	0.71	0.29	0.44	0.34	0.09			
ネササ属型		0.11	0.29	0.11	0.04	0.04	0.07	0.39	0.14	0.04	0.04	0.04	0.07	0.07	0.07	0.04	0.20	0.11	2.00	0.20	0.04		
クマササ属型		0.06	0.45	0.93	0.99	0.92	1.68	3.26	0.34	0.88	0.60	0.57	1.99	1.44	0.89	1.44	0.05	0.80	1.90	0.58	1.28	1.17	

※総計の販売量を1.0と仮定して算出。

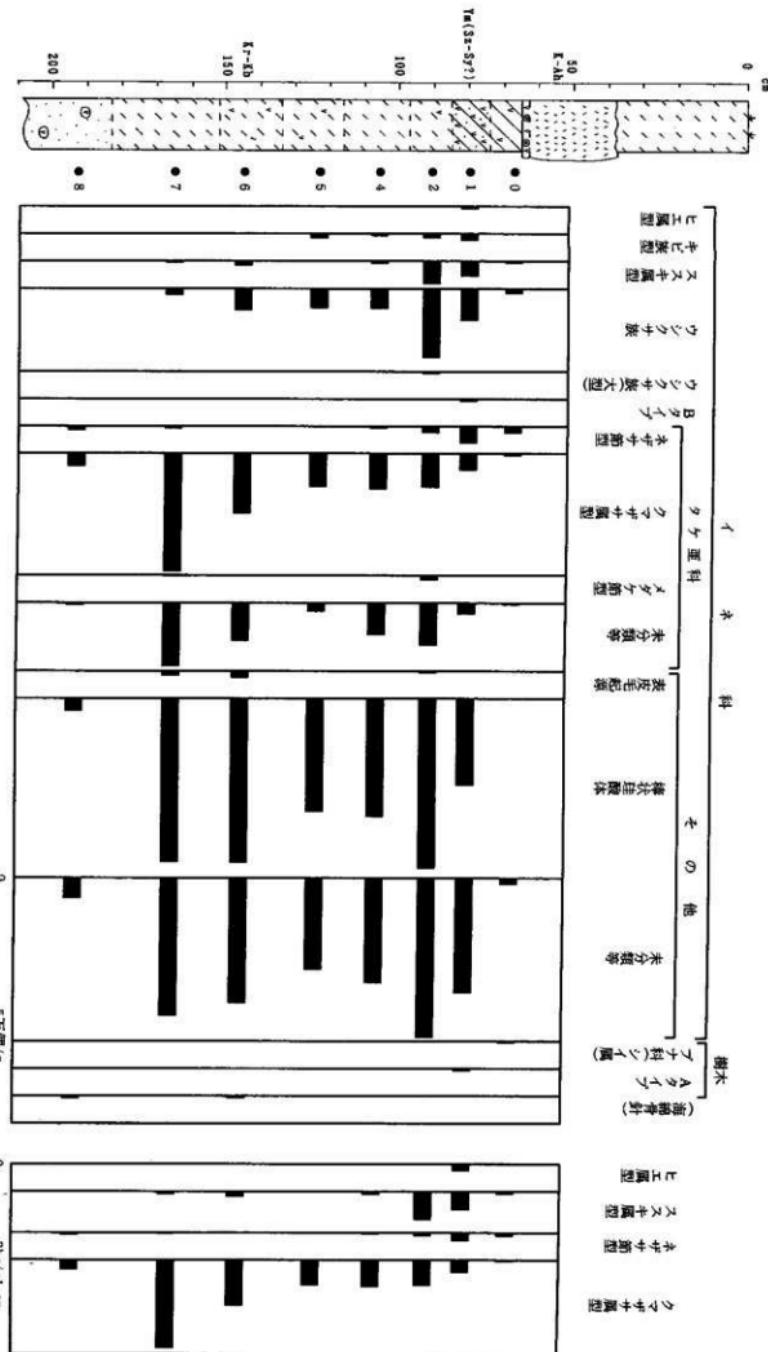


図 1 杉木深道跡 第1地点の植物生産量分析結果

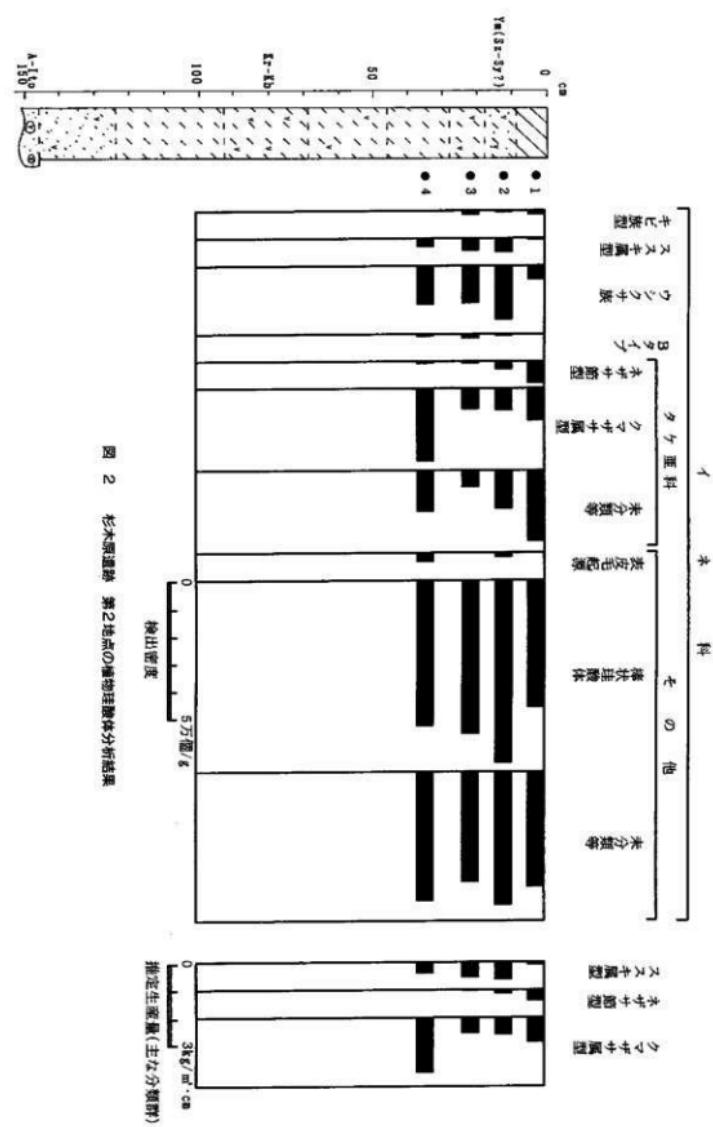
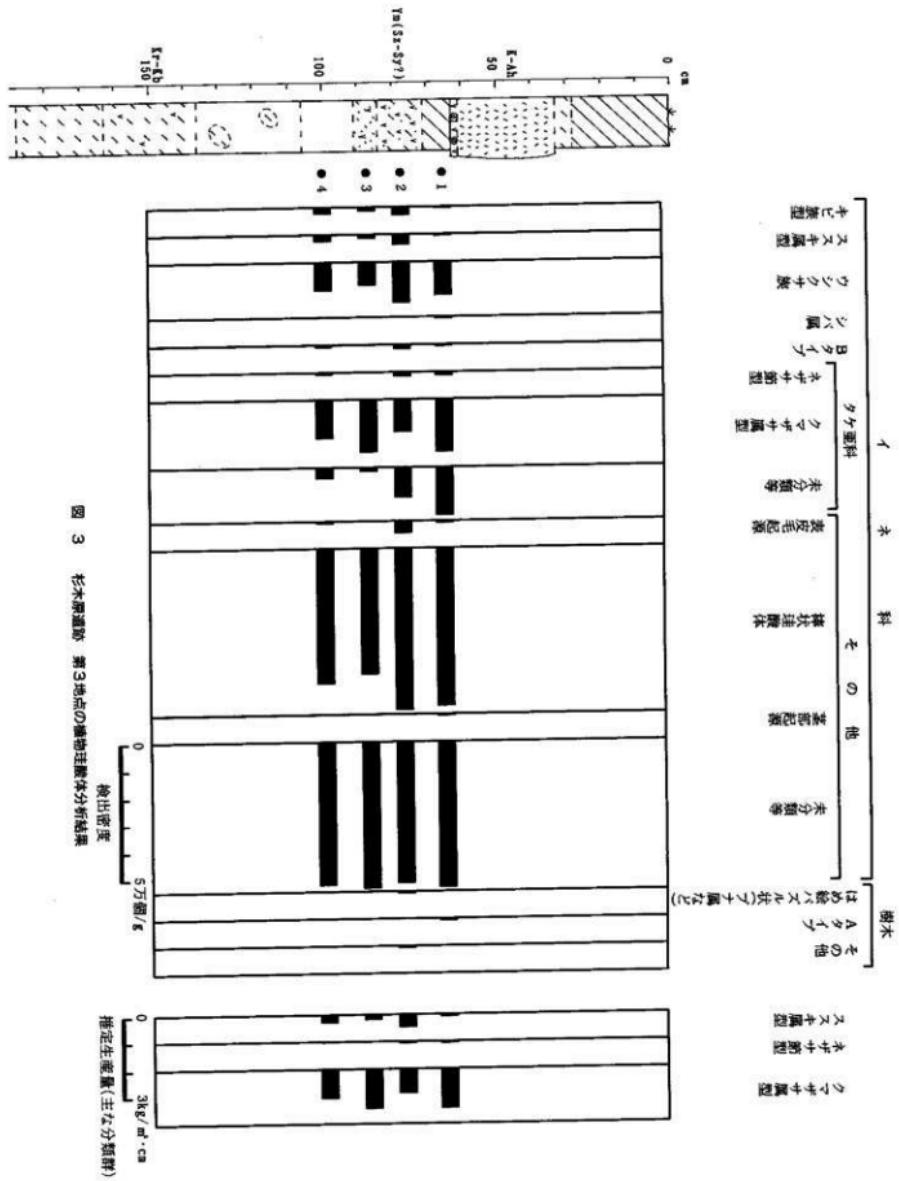


図 2 杉木原森林 第2地点の植物組成分析結果



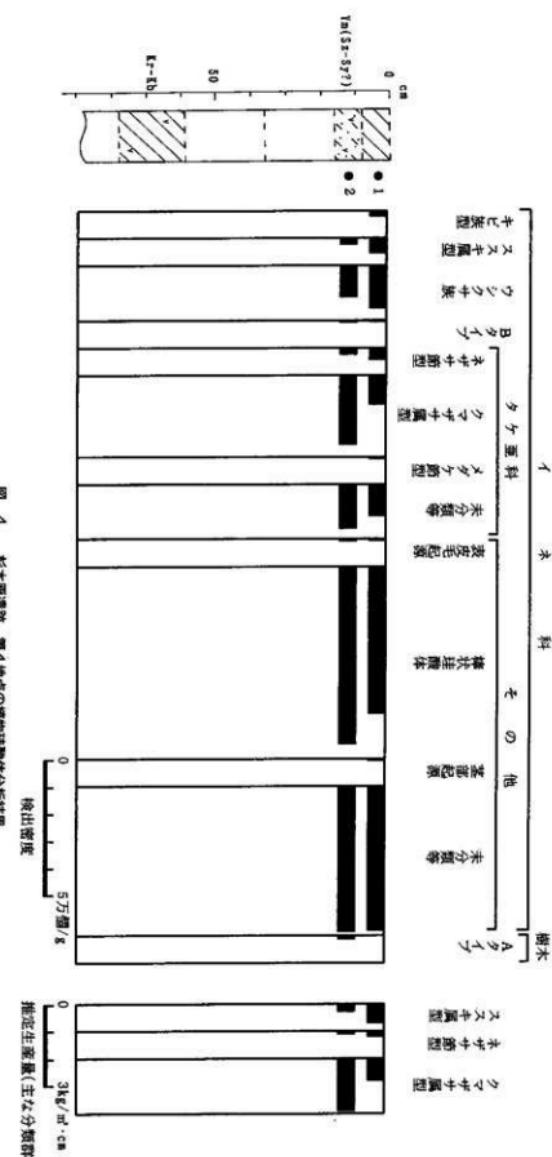


図 4 杉木原道跡 第4地点の植物遺体分析結果

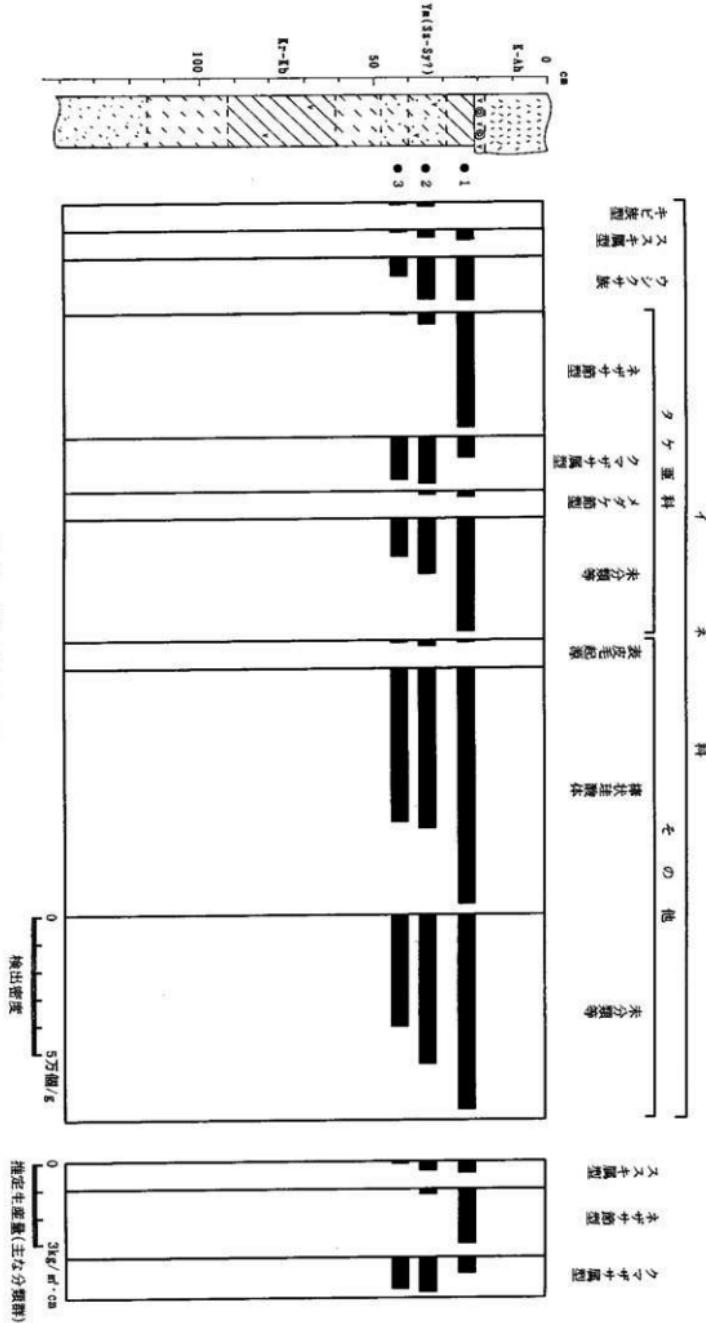


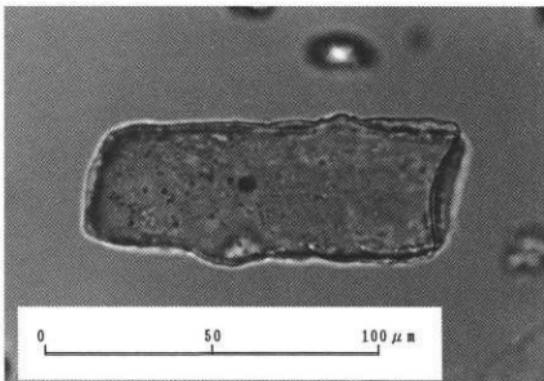
図 5 杉木原道路 第5地点の植物生根体分析結果

植物珪酸体の顕微鏡写真

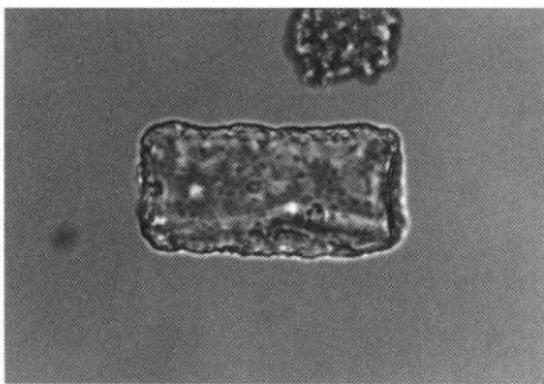
(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	ヒエ属型	1	1
2	キビ族型	5	3
3	ススキ属型	1	1
4	ススキ属型	2	4
5	ウシクサ族	5	2
6	イネ科B	2	2
7	イネ科(不明)	3	3
8	ネザサ節型	5	1
9	ネザサ節型	3	1
10	クマザサ属型	3	1
11	棒状珪酸体	4	2
12	モクレン科?	3	2

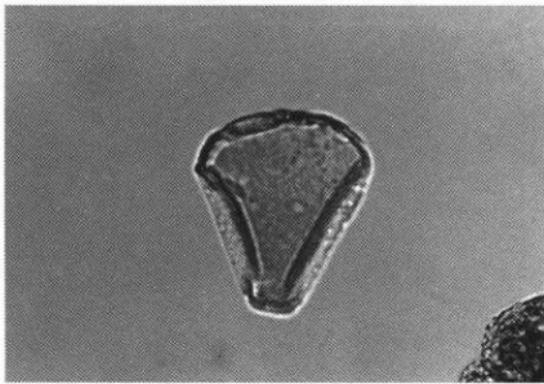
1

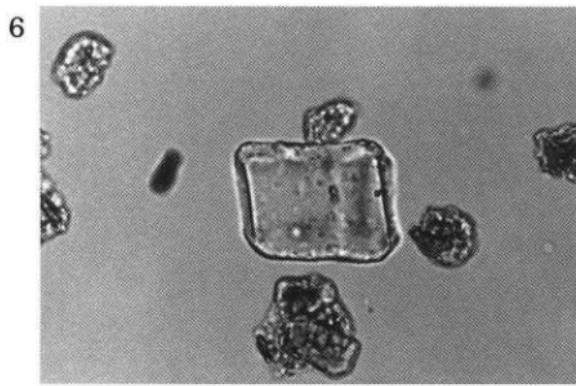
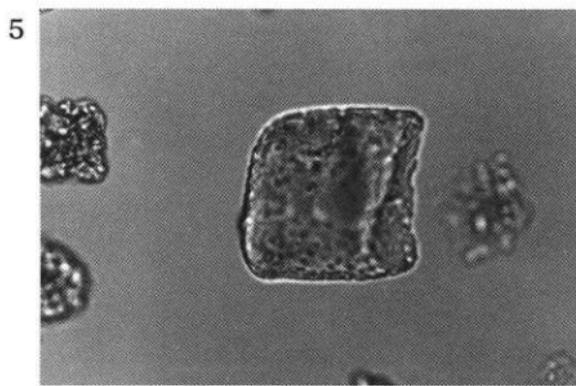
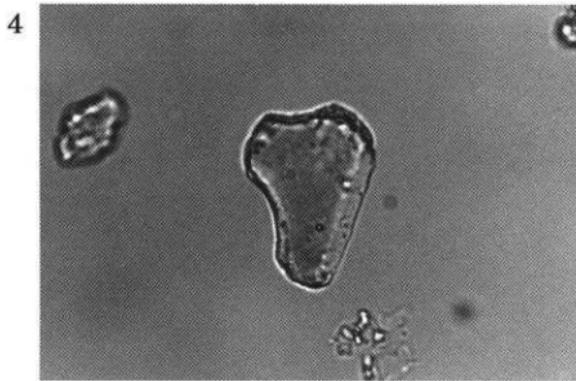


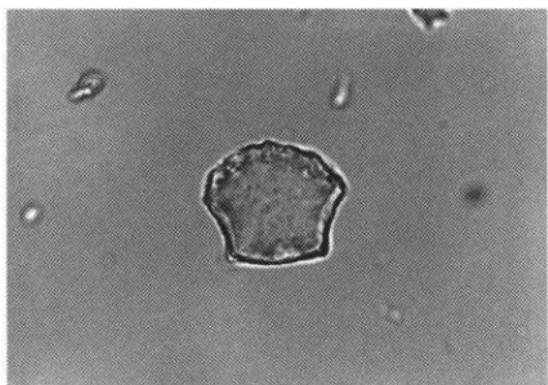
2



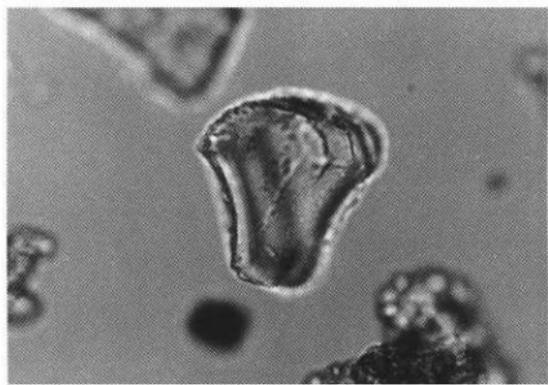
3



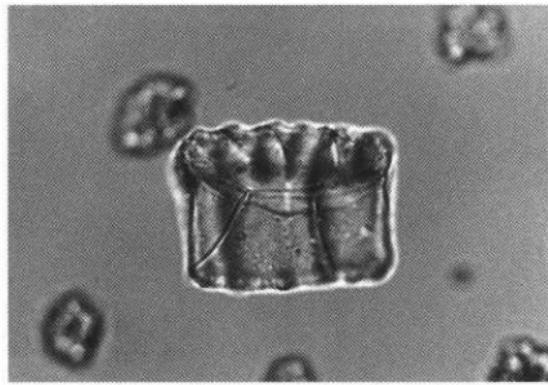




7

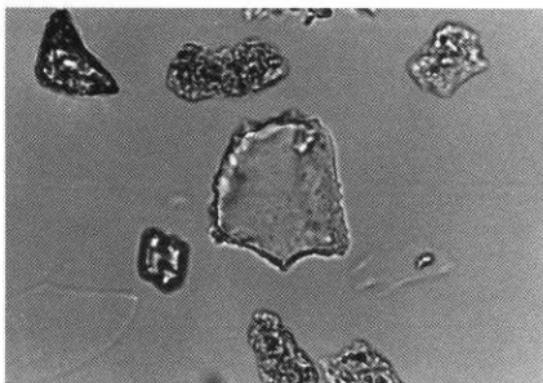


8

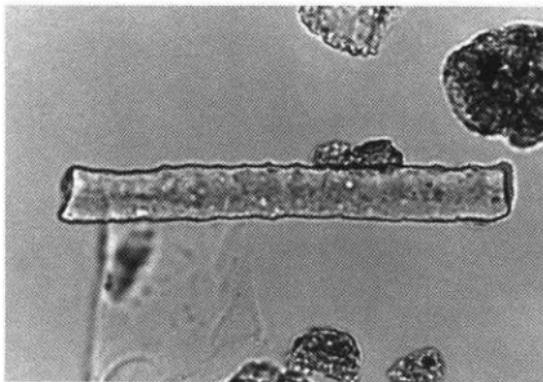


9

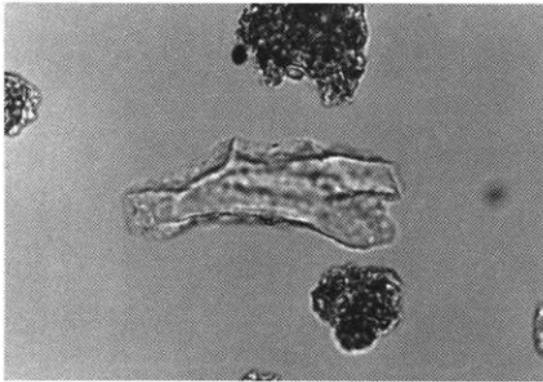
10



11

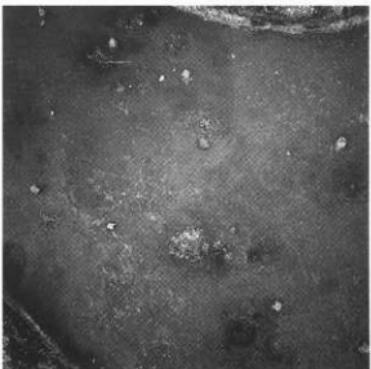


12





杉木原遺跡 全景



杉木原遺跡 集石造構築状況



杉木原遺跡 3号集石構築状況



杉木原遺跡 4号集石構築状況



杉木原遺跡 6号集石核出状況



杉木原遺跡 27号集石核出状況



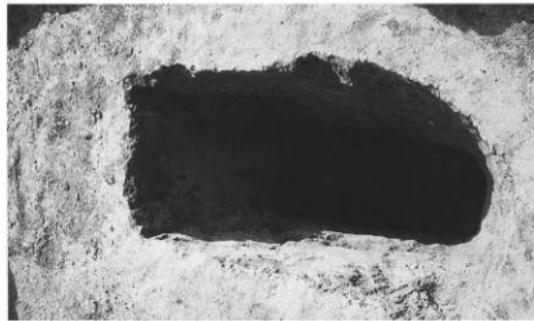
杉木原遺跡 29号集石核出状況



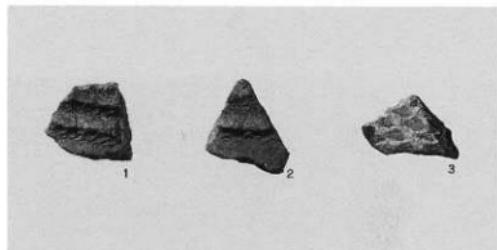
杉木原遺跡 30号集石棲出状況



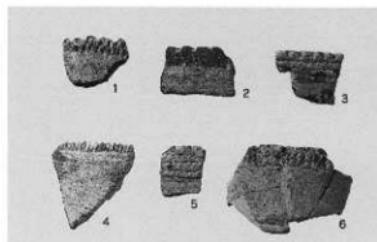
杉木原遺跡 42号集石棲出状況



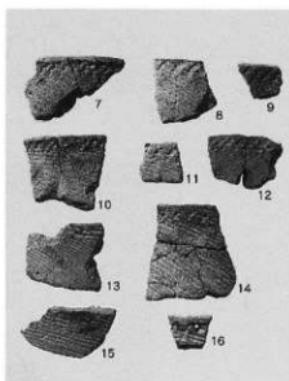
杉木原遺跡 陷し穴遺構棲出状況



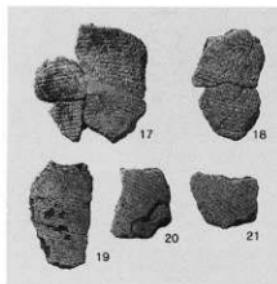
杉木原遺跡 繩文草創期土器



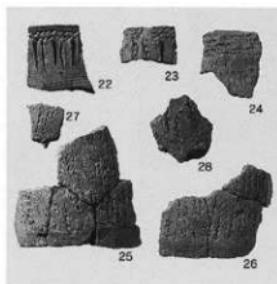
杉木原遺跡 繩文早期土器1（I類）



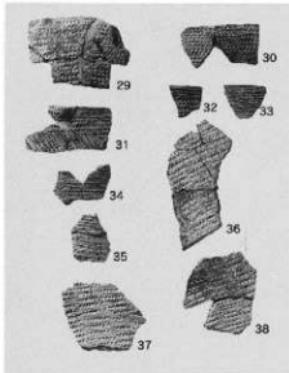
杉木原遺跡 繩文早期土器2（II類）



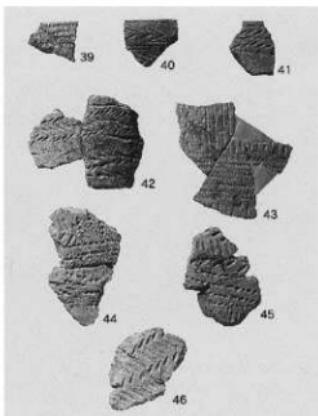
杉木原遺跡 繩文早期土器3（II類胴部）



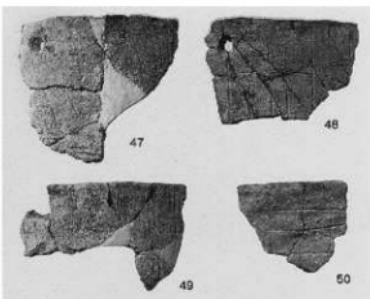
杉木原遺跡 繩文早期土器4（III類）



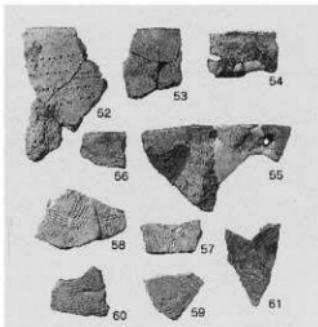
杉木原遺跡 繩文早期土器5（IV類）



杉木原遺跡 織文早期土器6 (VI類)



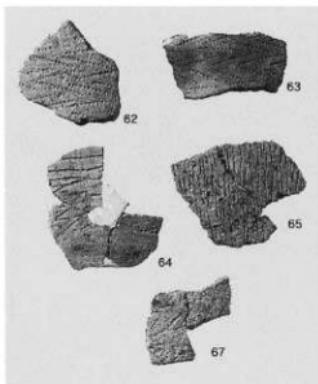
杉木原遺跡 織文早期土器7 (VI類)



杉木原遺跡 織文早期土器8 (VI類)



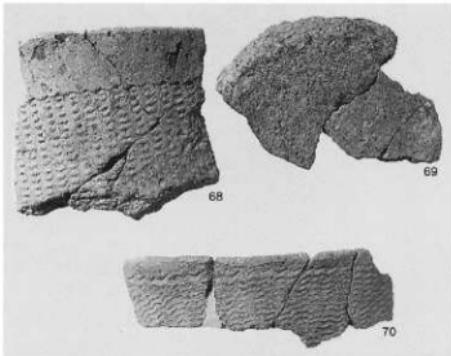
杉木原遺跡 織文早期土器8 (VI類底部)



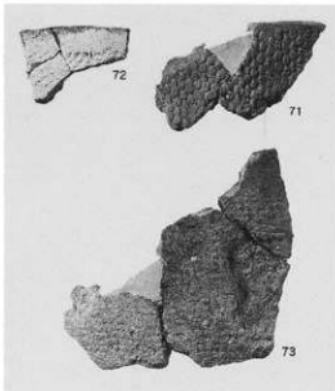
杉木原遺跡 織文早期土器10 (VII類)



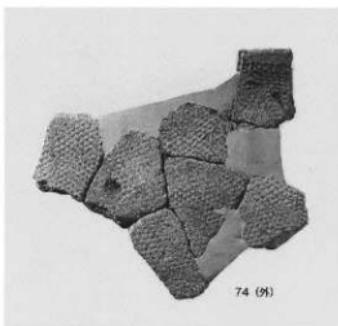
杉木原遺跡 織文早期土器11 (V類)



杉木原遺跡 縄文草創期土器12 (Vm'a類)



杉木原遺跡 縄文早期土器13 (Vm'a類)



杉木原遺跡 縄文早期土器14 (Vm'b1類)



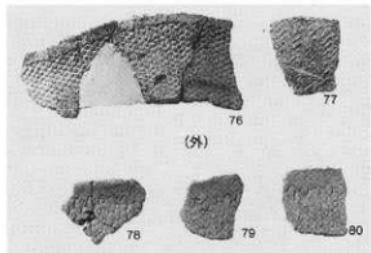
杉木原遺跡 縄文早期土器15 (Vm'b1類)



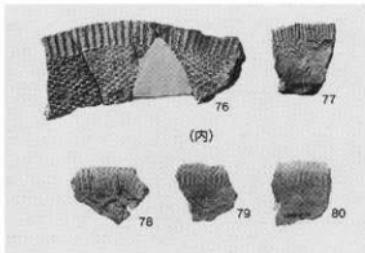
杉木原遺跡 縄文早期土器16 (Vm'b1類)



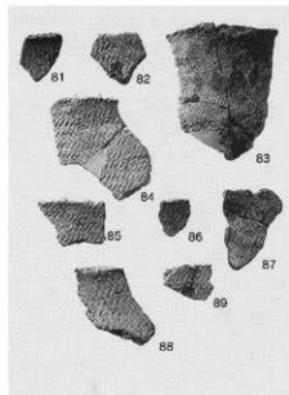
杉木原遺跡 縄文早期土器17 (Vm'b1類)



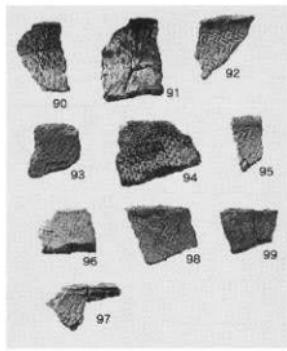
杉木原遺跡 繪文早期土器18 (WIIIb1類)



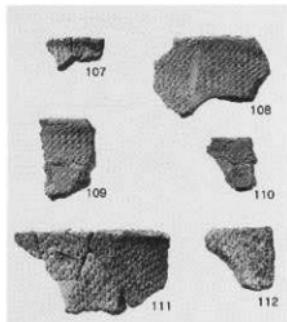
杉木原遺跡 繪文早期土器19 (WIIIb1類)



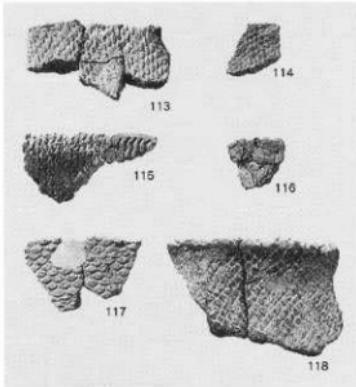
杉木原遺跡 繪文早期土器20 (WIIIb2類)



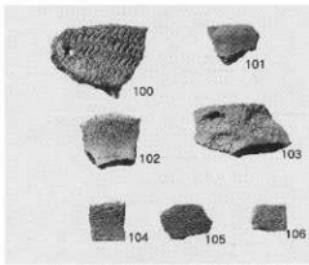
杉木原遺跡 繪文早期土器21 (WIIIb2類)



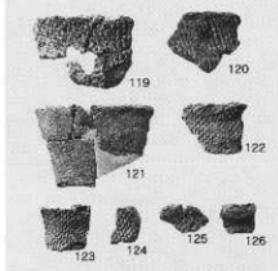
杉木原遺跡 繪文早期土器23 (WIIIc1 - WIIIc2類)



杉木原遺跡 繪文早期土器24 (WIIIc2類)

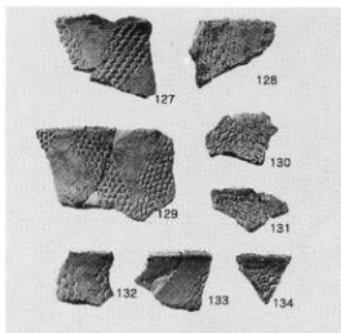


杉木原遺跡 繪文早期土器22 (WIIIb2類)

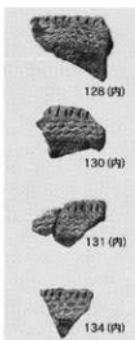


杉木原遺跡 繪文早期土器25 (WIIIc2類)

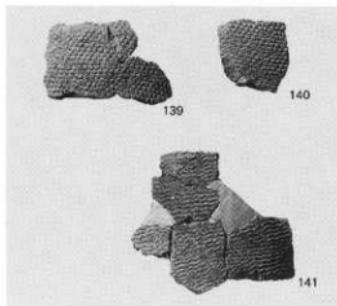
図版8



杉木原遺跡 繩文早期土器26 (VIIa基)



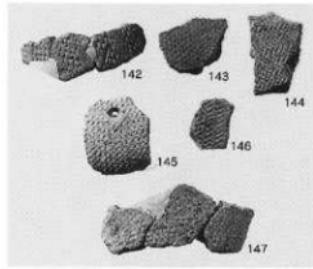
杉木原遺跡 繩文早期土器27 (VIIc基)



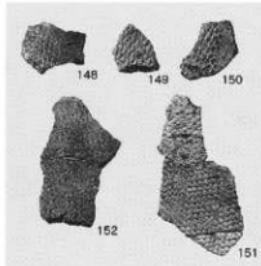
杉木原遺跡 繩文早期土器28 (VIIc頸部)



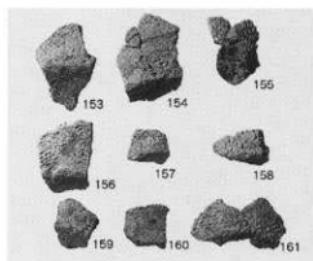
杉木原遺跡 繩文早期土器33 (VIIc底部)



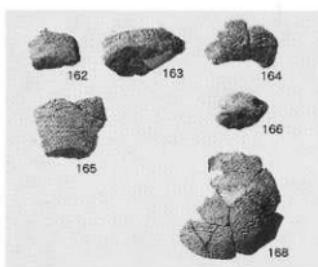
杉木原遺跡 繩文早期土器29 (VIIc頸部)



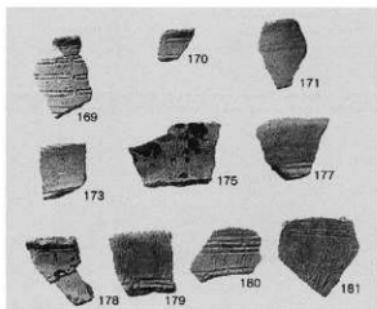
杉木原遺跡 繩文早期土器30 (VIIc底部)



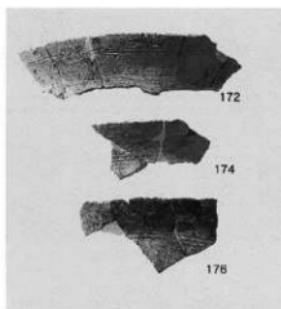
杉木原遺跡 繩文早期土器31 (VIIc底部)



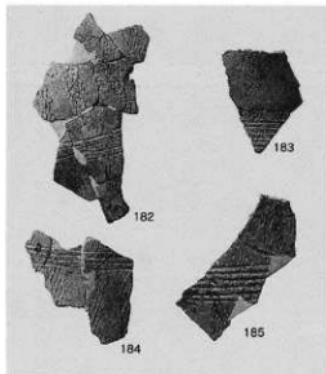
杉木原遺跡 繩文早期土器32 (VIIc底部)



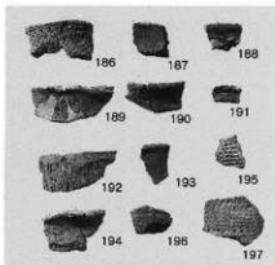
杉木原遺跡 繩文早期土器34 (IX類)



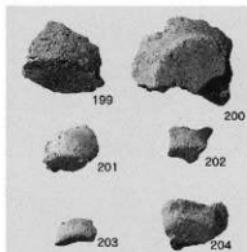
杉木原遺跡 繩文早期土器35 (IX類)



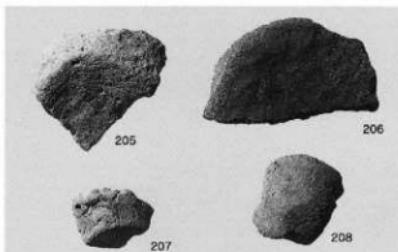
杉木原遺跡 繩文早期土器36 (IX類底部)



杉木原遺跡 繩文早期土器37 (X類)



杉木原遺跡 繩文早期土器38 (底部)

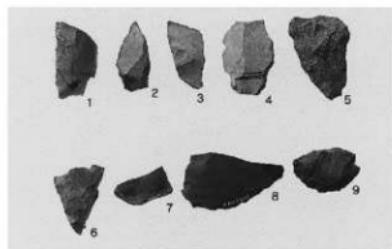


杉木原遺跡 繩文早期土器39 (底部)

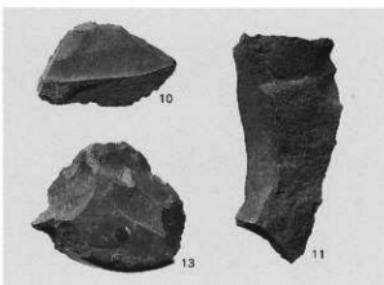


杉木原遺跡 繩文早期土器40 (底部)

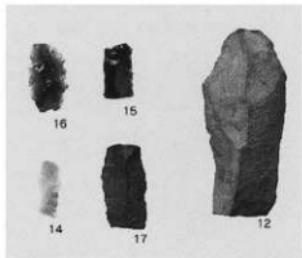
図版10



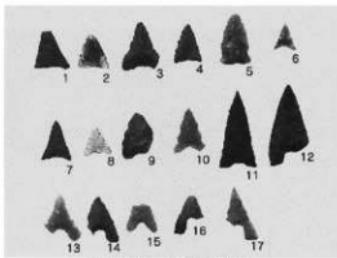
杉木原遺跡 旧石器 (1)



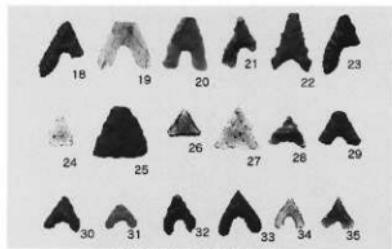
杉木原遺跡 旧石器 (2)



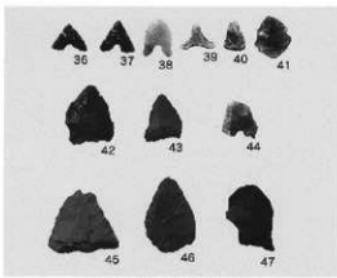
杉木原遺跡 旧石器 (3)



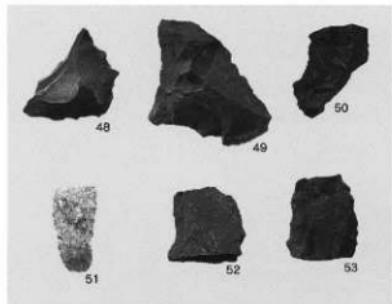
杉木原遺跡 縄文石器 (1)



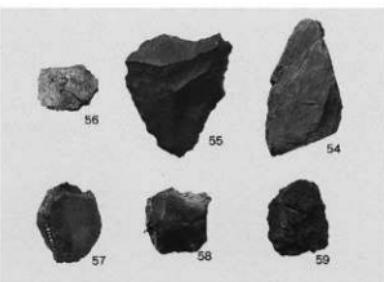
杉木原遺跡 縄文石器 (2)



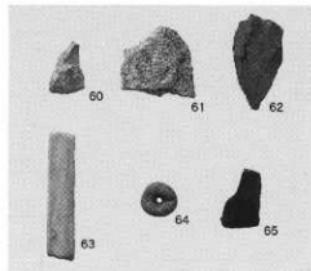
杉木原遺跡 縄文石器 (3)



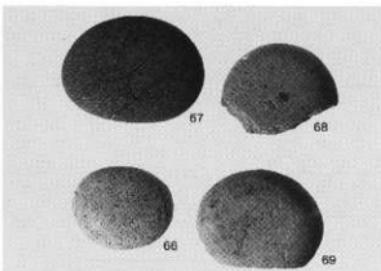
杉木原遺跡 縄文石器 (4)



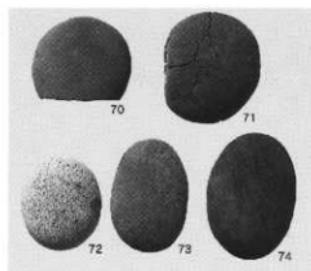
杉木原遺跡 縄文石器 (5)



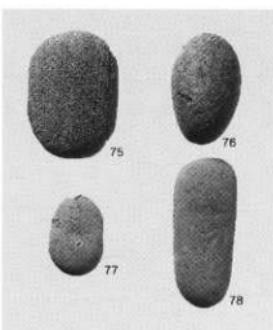
杉木原遺跡 繩文石器 (6)



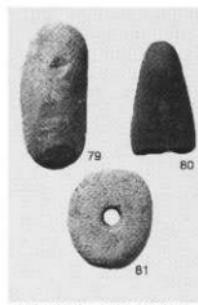
杉木原遺跡 繩文石器 (7)



杉木原遺跡 繩文石器 (8)



杉木原遺跡 繩文石器 (9)



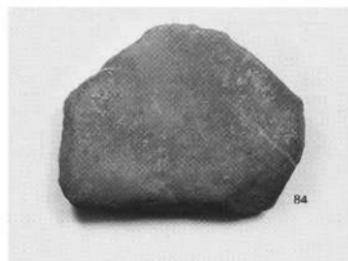
杉木原遺跡 繩文石器 (10)



杉木原遺跡 繩文石器 (11)



杉木原遺跡 繩文石器 (12)



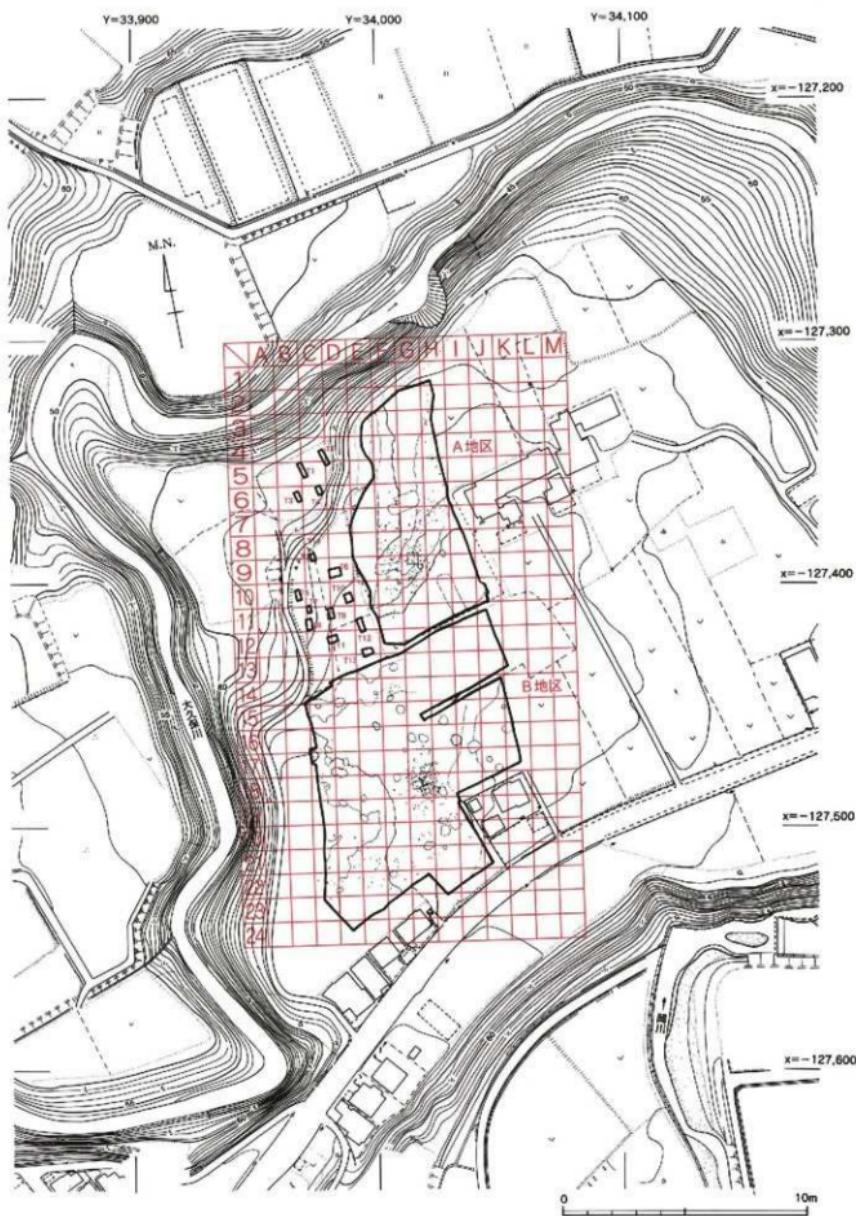
杉木原遺跡 繩文石器 (13)



杉木原遺跡 繩文石器 (14)

なが の はる

永ノ原遺跡



第1図 永ノ原遺跡 調査区及びグリッド配置図 (S=1/2,000)

第VI章 永ノ原遺跡

第1節 調査の経過と概要（第1回）

永ノ原遺跡は清武町の南西部にあたり、清武川の支流にあたる大久保川と岡川とに挟まれた標高約6.9mの河岸段丘上に位置する。調査地は、北から東に蛇行を繰り返す大久保川と岡川によって形成された急崖が接する丘陵地で、その中でも比較的広く平坦な地形に立地する。北側低地との比高差約1.3mまた南側低地との比高差約1.6mを測る。なお、大久保川の対岸（北側）に位置する下星野遺跡とは約21m離れている。

本遺跡では、調査対象面積14,670m²のうち、用地買収が終了した4,900m²（主に調査対象範囲の西側平坦面）について平成7年9月12日から9月21日まで確認調査を行なった。

確認調査は、幅2~3m×長さ3~5mのトレンチを設定し、基本的に表土を除去した後、層ごとに遺構・遺物の存否確認を行ない、遺構・遺物の確認出来ないトレンチについては最終的に縦層（IX層）上面まで掘り下げを行なった。その結果、対象範囲の西側中央から南側にかけて設定したトレンチにおいて、褐色土（IVa）層中に縄文後期の土器片やその下層にあたる、アカホヤ火山灰層（IVb）層上面でピット等の遺構が、IVb層の下で焼燭を確認し、少なくとも2枚の文化層を確認し、その部分より本調査を行うことになった。

本調査に際し、便宜上、調査区を北東側の畠地（未買収地）をA地区、また中央の畠地の土手を利用し、そこから南側にかけてをB地区（一部、未買収地を含む）、A区の北西側に一段落ちた畠地（未買収地）をC地区と設定した。また座標ごとに10m×10mのグリッドを調査対象範囲に設定し、北から南方向に1~24、西から東方向にA~Mとして設定した。

本調査は平成7年度は平成7年9月25日から平成8年3月31日まで、そして平成8年度は平成8年4月8日から平成8年7月31日までの約10ヶ月間行なわれた。

調査はB地区西側から開始した。表土を重機によって除去し、IVb層を目安に、その上層が残っている部分については人力で掘り下げを行ない、その面で遺構確認を行なった。またIVb層面の調査後、IVb層を人力もしくは重機で除去し、その下のV~VI層（縄文時代早期包含層）の掘り下げを人力で行ない、遺構・遺物の確認を行なった。また調査と併行して、2月後半からは用地買収が終了したA地区・C地区的確認調査を行なった。A地区の中央に設定したトレンチからは黒褐色土（III層）中より、弥生時代後期の土器片が出土し、北側ではVI層中で焼燭が比較的多く確認された。

またC地区的第1トレンチで、IVb層の下より、黒曜石製の石核や碎片、砂岩製の二次加工剥片が出土した。ただしC地区については他のトレンチでは表土が厚く、VI層もしくはIX層まで削平を受けていることから、包含層の残りが悪いと判断し、A地区的調査を重点的に行なうこととした。

またこの時期（2月~3月）は、強風が吹き荒れ、調査区及びその周辺に粉塵が飛び散り、作業の進行が容易ではなかった。さらに強風の度に、周辺の民家からも苦情が寄せられたことから、塵土にブルーシートを掛け、その他の部分には防塵剤（塩化カリウム）を播いて粉塵が飛ばぬように対応したが、なかなか効果が表れなかった。そこで後半からは調査区に接する民家との境に防砂ネットを設

置して対応した。

3月からはB地区の北東側を拡張し、新たにA地区の調査も開始した。3月末の時点で、A地区ではⅢ層で弥生時代～古墳時代の土器片やIV b層上面で時期不明のピット群を確認した。またB地区西側では、IV b層上面で弥生時代の竪穴住居跡1軒、時期不明の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡7軒、ピット群等の遺構や縄文時代前期・後期の遺物を確認し、さらにV～VI層にかけて縄文時代早期の遺物とともに集石遺構10基を確認している。

平成8年度は引き続き、A地区でIV b層面及びのV～VI層の調査とB地区でVI層の調査を行なった。A区地ではIV b層面で時期不明の掘立柱建物跡1軒と土坑1基を確認した。その後、IV b層を除去し、V層～VI層の掘り下げを行なったが、特に中央から南側にかけては遺構は確認されず、遺物も散発的にしか出土しないことからトレーニングを設定し、掘り下げを行なったが何も確認されなかった。このことより遺物が比較的出土している北側を重点的に掘り下げを行ない、集石遺構3基を確認した。またB地区では、6月後半から東側（民家の裏側）を拡張し、IV b層面で時期不明の竪穴住居跡1軒、VI層中で縄文時代早期の集石遺構を1基確認された。

第2節 遺跡の層序（第2図）

本遺跡では、鍵層としてII層に高原スコリア風成二次堆積層やIV b層にアカホヤ火山灰層、VI層には小林軽石風成二次堆積層が確認されている。また遺物包含層は、III～IV a層、V～VI層でそれぞれ確認されている。以下、層ごとに説明していきたい。

I層 表土（耕作土）

II層 黒褐色土層（5～10cm）

比較的粘性があり、1～2mm程度の高原スコリア粒を多く含む。大半が耕作等により削平を受け、A区の中央部に一部残存している。

III層 黒褐色土層（10～15cm）

粒子はやや細かく、粘性を帯びる。A区の中央部とB区の中央部北側～南側にかけて堆積が認められた。遺物包含層で縄文時代後期や弥生中期～古墳時代初頭の遺物が確認されている。また層位横軸が調査区全体で34箇所確認されているが、そのほとんどがこのIII層を最上層としている。

IV a層 黄褐色土層（約15cm）

アカホヤ火山灰の風成二次堆積層で、粒子が細かく、サラサラしてしまったのがない。IV b層と比べ、色調が若干暗い。A区の一部やB区西側で堆積が認められた。遺物包含層で縄文時代前期・後期の土器片や石器等を包含している。

IV b層 黄褐色火山灰層（20～30cm）

アカホヤ火山灰層（一次堆積）である。粒子が細かく、下部には火山豆石が確認されている。A区北側～中央とB区中央部北側～南側にかけて堆積が認められ、他は耕作等により削平を受けていた。

V層 黑褐色土層（10～15cm）

硬質でしまりがあり、白色粒等を含む。層中位～下位にかけて縄文時代早期の遺物が出土している。

VI層 暗褐色土層 (25~30cm)

やや硬質で粘性を帯びる。縄文時代早期の包含層で集石遺構や土器片・石器を確認している。B区南端ではVI層の堆積が薄く、すぐその下にIX層の礫層がみられる。

VII層 暗褐色土層 (~10cm)

硬質で小林輕石等を含む。ブロック状に堆積し、A区の一部でのみ、確認されている。

VIII層 黄褐色土層 (10~20cm)

水気が多く、粘性が強い。部分的に小礫が多くみられる。

IX層 磯層

第3節 調査の成果

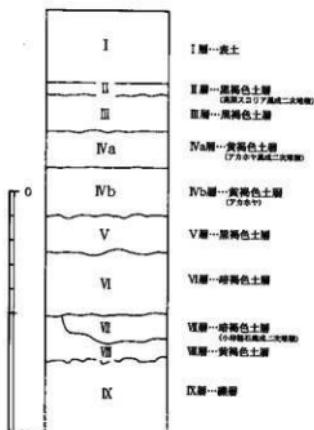
1 旧石器時代の遺物 (第3図)

旧石器時代と思われる遺物は2点確認されている。どちらもIVa層で出土しており、層位的に疑問が残る。ここでは、遺物の説明のみに留めたい。

1は細石刃である。断面形は三角形を呈し、表面には細石刃を連続して剥出した痕が認められる。

2は細石核で礫を分割後、側面調整を行ない、正面を作業面として細石刃を剥出している。打面調整は認められない。また、底面には礫面を残している。

1・2とどちらも黒曜石製である。



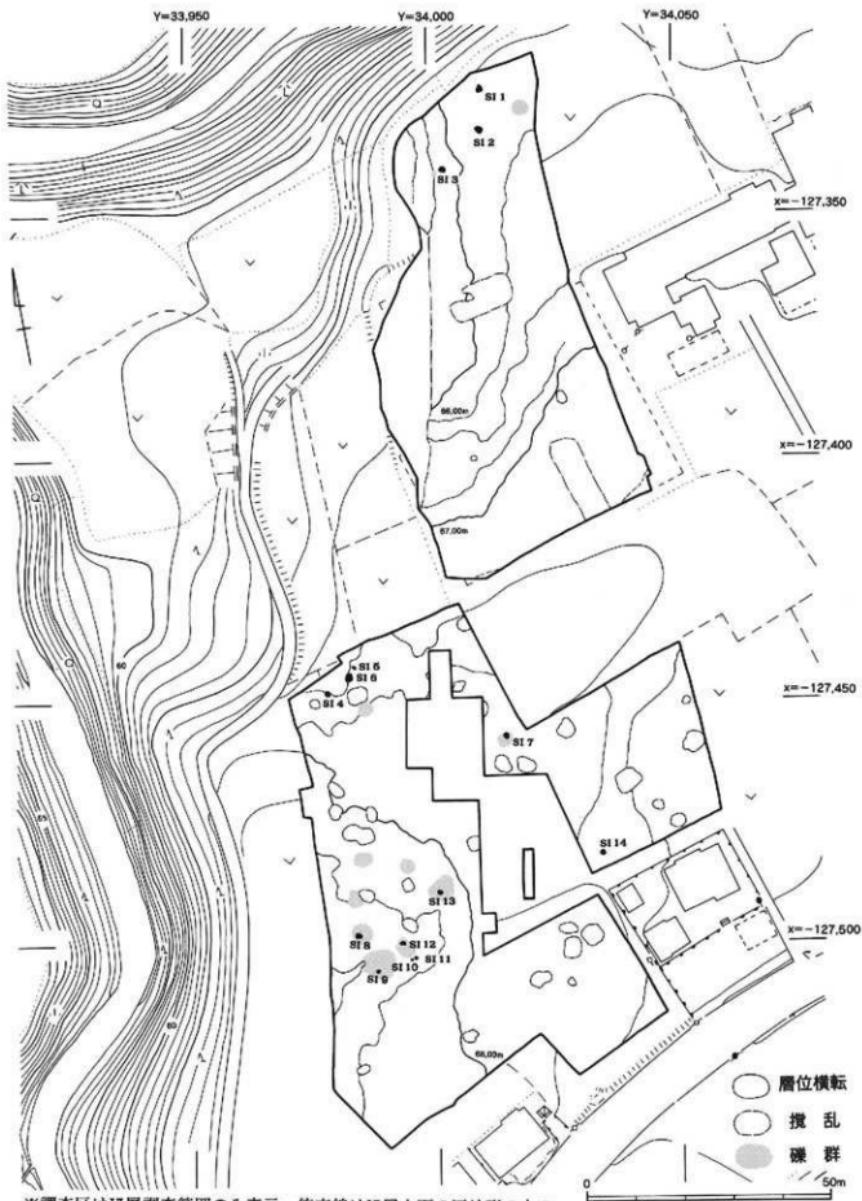
第2図 永ノ原遺跡 基本土層柱状図



第3図 永ノ原遺跡 旧石器時代遺物実測図

表1 永ノ原遺跡 旧石器時代遺物計測表

番号	出土位置	層位	器種	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
1	B区-D22	-	細石刃	2.03	0.58	0.39	0.4	黒曜石	
2	B区-D23	IVa	細石核	1.11	2.14	1.48	3.8	黒曜石	



※調査区はVI層調査範囲のみ表示。等高線はVI層上面の原地形のもの。

第4図 永ノ原遺跡 繩文時代早期遺構分布図 (S=1/1,000)

2 縄文時代早期の遺構・遺物

(1) 遺構

集石遺構 (S I)

集石遺構は、14基確認されており、A区北側 (S I 1~3) 及びB区北側 (S I 4~6) や西側中央 (S I 8~13) でまとまって確認されており、その約半数が掘り込みをもつ。また散疊群として扱ったものが11箇所 (A区2箇所、B区9箇所) でみられ、うち6箇所は集石遺構を囲むように形成されている。以下、個別に説明していきたい。

S I 1 (第5図)

S I 1は、A区北端に位置し、VI層上面で検出している。径1.4m×1.0mの範囲に170個程度の2cm~12cm程度の砂岩の円疊・角疊 (破碎疊) が比較的まとまりを見せ、断面形は若干レンズ状に集積している。疊のほとんどが赤変していて、部分的に黒変した疊もみられる。

S I 2 (第5図)

S I 2は、A区北側に位置し、北に位置するS I 1と約8m離れている。VI層中位で検出し、径1.3m×1.1m、検出面からの深さ0.52mを測る略梢円形を呈する土坑内に130個程度の砂岩疊が密に集積する。疊は土坑の中央部、底面近くで長径約12cm~20cm程度の比較的大きな扁平な疊を5個使用し、上部は10cm前後の扁平な疊が多く、一部2cm~6cm前後の角疊もみられる。また上部に集積する疊は比較的赤変が著しいが、下部のものはそれほど赤変していない。炭化物は土坑底面及び西側中段で5mm前後のものが比較的密集している。土坑の埋土は2層に分層出来、上層は粒子の細かい暗褐色土、疊下に黒褐色土が堆積していた。

S I 3 (第6図)

S I 3は、A区北西側に位置し、北東に位置するS I 2と約12m離れている。VI層中位で検出し、径1m×0.85m、深さ0.15mの梢円形を呈する土坑内に、160個程度の砂岩疊が密に集積する。疊の範囲は径1.3m×0.9mと土坑の規模よりも広がる。疊は土坑底面中央部に20cm前後の扁平な疊5点を敷き、上部には4cm~25cmの大きさの扁平な疊や角疊が利用されている。また疊は比較的赤変が著しく、下部のものには部分的に黒変した疊もみられる。炭化物は、土坑底面付近で多くみられる。土坑の埋土は1層で褐色土中に黒褐色土がブロック状に含まれている。

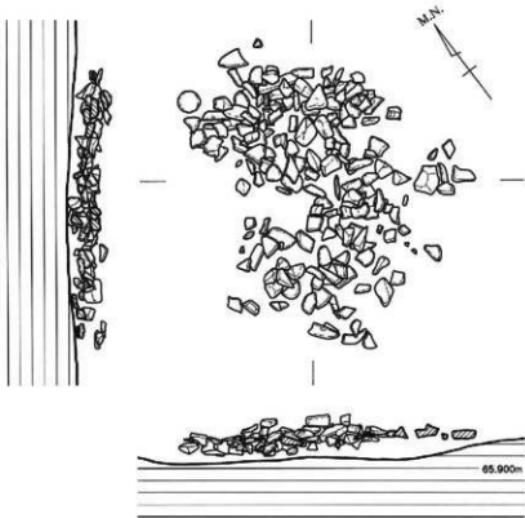
S I 4 (第6図)

S I 4はB区北西端に位置する。VI層中位で検出し、径1.2m×1mの範囲内に5cm~10cm程度の砂岩の角疊 (100個前後) で構成されている。疊は水平に集積し、南側はやや密集 (後世の掘り込みによって一部破壊されている) いているが、北側へ向かって疊が散財している。全体的に赤化があまりみられず、炭化物もあまり確認されていない。また、チャート製の石鏃 (1) が1点確認されている。石鏃の全体形は正三角形を呈し、U字状の深い抉りをもつ。脚端は丸くなるよう加工が施されている。

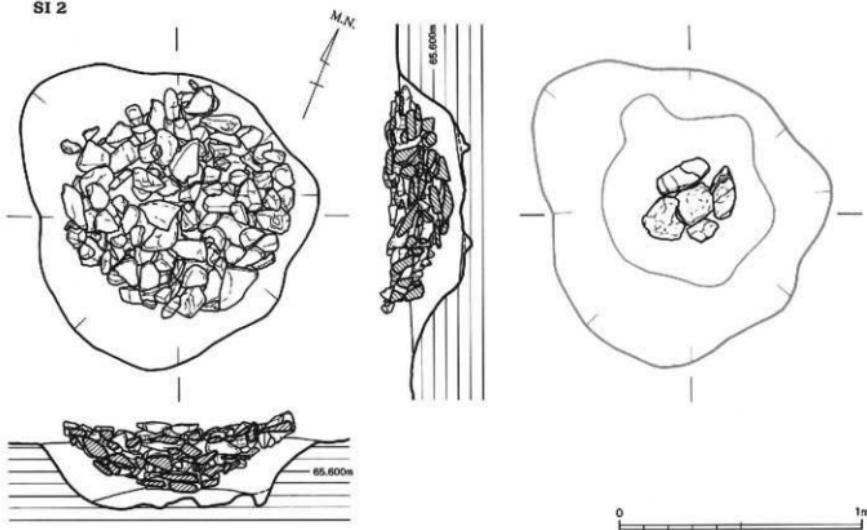
S I 5 (第6図)

S I 5はB区北西端、S I 4の北東約7m先に位置する。径0.8m×0.5mの範囲内に、4

SI 1

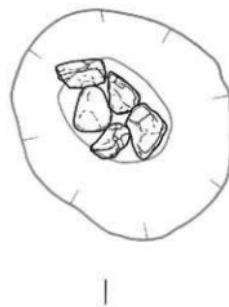
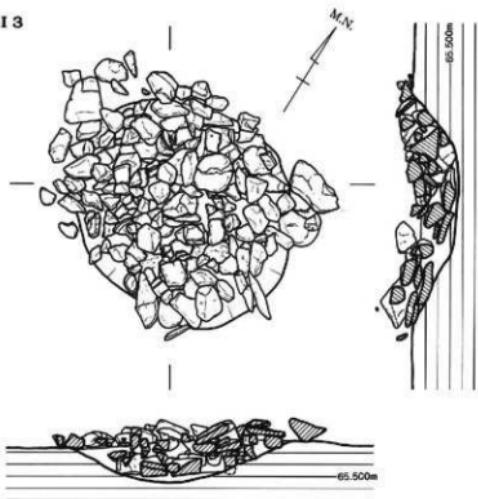


SI 2

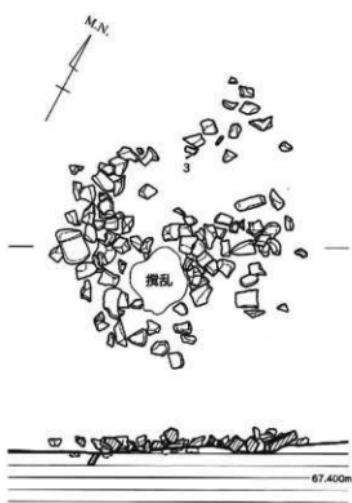


第5図 永ノ原遺跡 S I 1・2遺構実測図 ($S=1/20$)

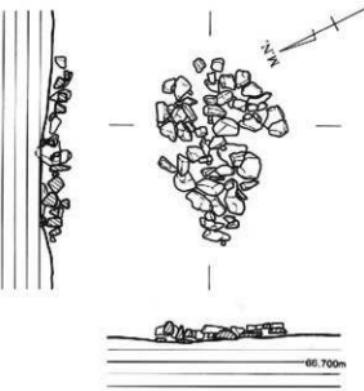
SI 3



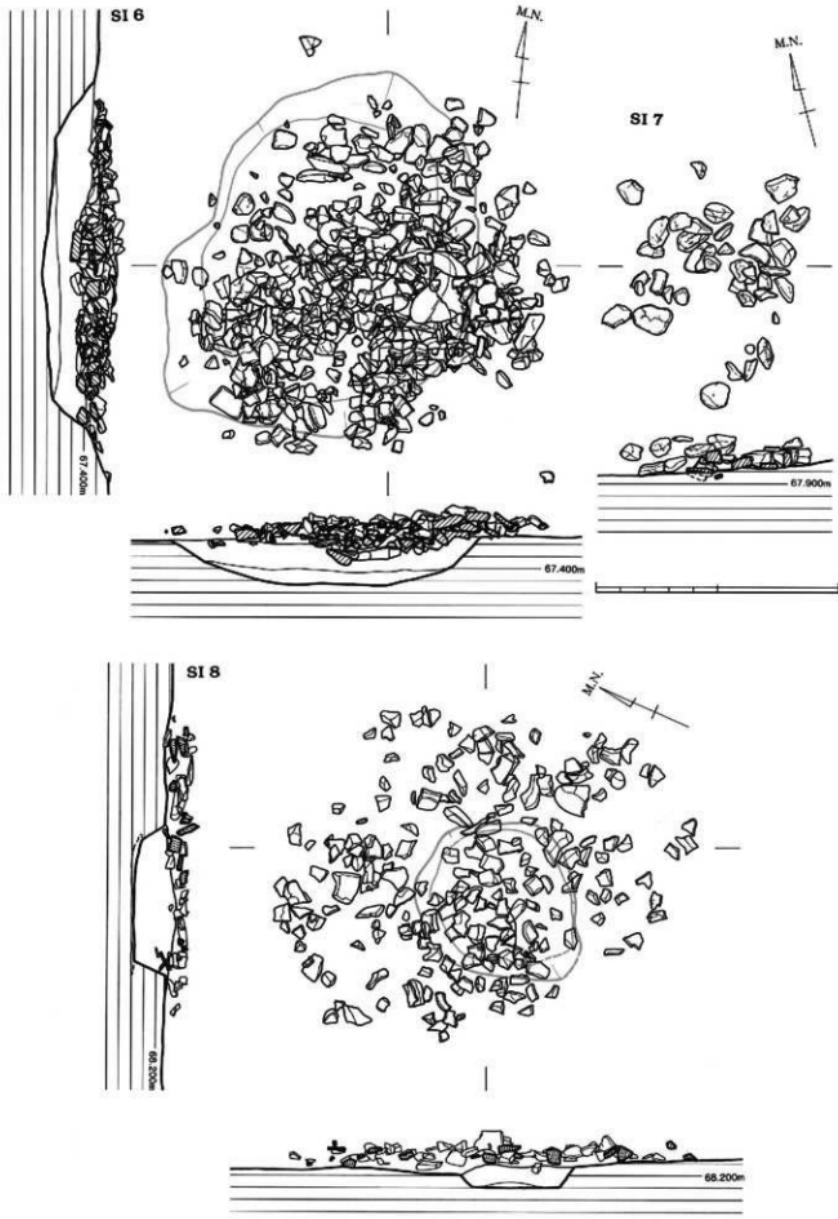
SI 4



SI 5



第6図 水／原遺跡 S I 3～5遺構実測図(S=1/20) 及びS I 4出土遺物実測図(S=2/3)



第7図 永ノ原跡 S 1 6~8 造機実測図 (S=1/20)

cm～15cm程度の砂岩の円礫・角礫（58個）で構成されている。全体的に赤化が進み、礫自体がもろく、破損礫が多い。礫は水平に集積し、やや密集している。炭化物や掘り込みは確認されていない。

S I 6（第7図）

S I 6はS I 4・5と同様にB区北西端、S I 5の南西約2m先に位置する。VI層上位で検出し、径1.55m×1.25m、深さ0.17mの楕円形を呈する土坑内及び土坑上面に、約500個程度の礫が径1.6m×1.4mの範囲に密に集積する。礫は4cm～25cmの大きさの扁平礫・角礫（砂岩）が利用されている。また礫は比較的赤化が著しく、破碎礫が多くみられた。また炭化物は北西側に集中してみられた。土坑の埋土は1層で炭化物を含む粒子の細かい黒褐色土が堆積していた。

S I 7（第7図）

S I 7はB区中央北寄り、S I 6の南東約3.4m先に位置する。VI層上位で検出し、径約1mの範囲内に40個の砂岩の扁平礫・角礫が集積されている。他の集石遺構と比べ、ややまばらである。礫は比較的赤変が著しく、遺構西側が特に顕著である。反対に西側では、黒変した礫が多く見受けられた。

S I 8（第7図）

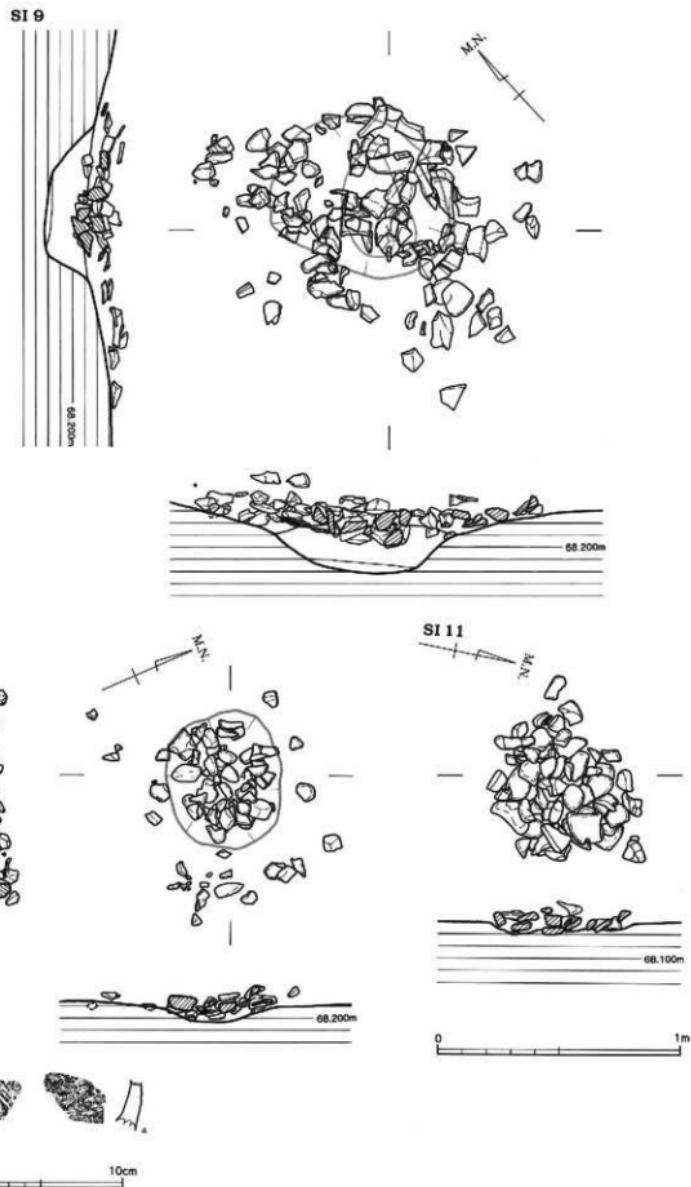
S I 8はB区中央西側に位置する。VI層上位で検出し、径0.75m×0.66m、深さ0.1mの楕円形を呈する土坑内上部及び土坑上面に、約220個程度の礫が径1.8m×1.4mの範囲にやや密に集積する。礫は5cm～15cmの大きさの砂岩の角礫が多く利用されている。また礫は、土坑上面のやや密に集積する部分が比較的赤変し、周辺に向かって赤変の度合いが弱くなる。また炭化物は土坑上面や土坑内に少量みられた。土坑の埋土は1層でやや粘質のある粒子の細かい黒褐色土が堆積していた。

S I 9（第8図）

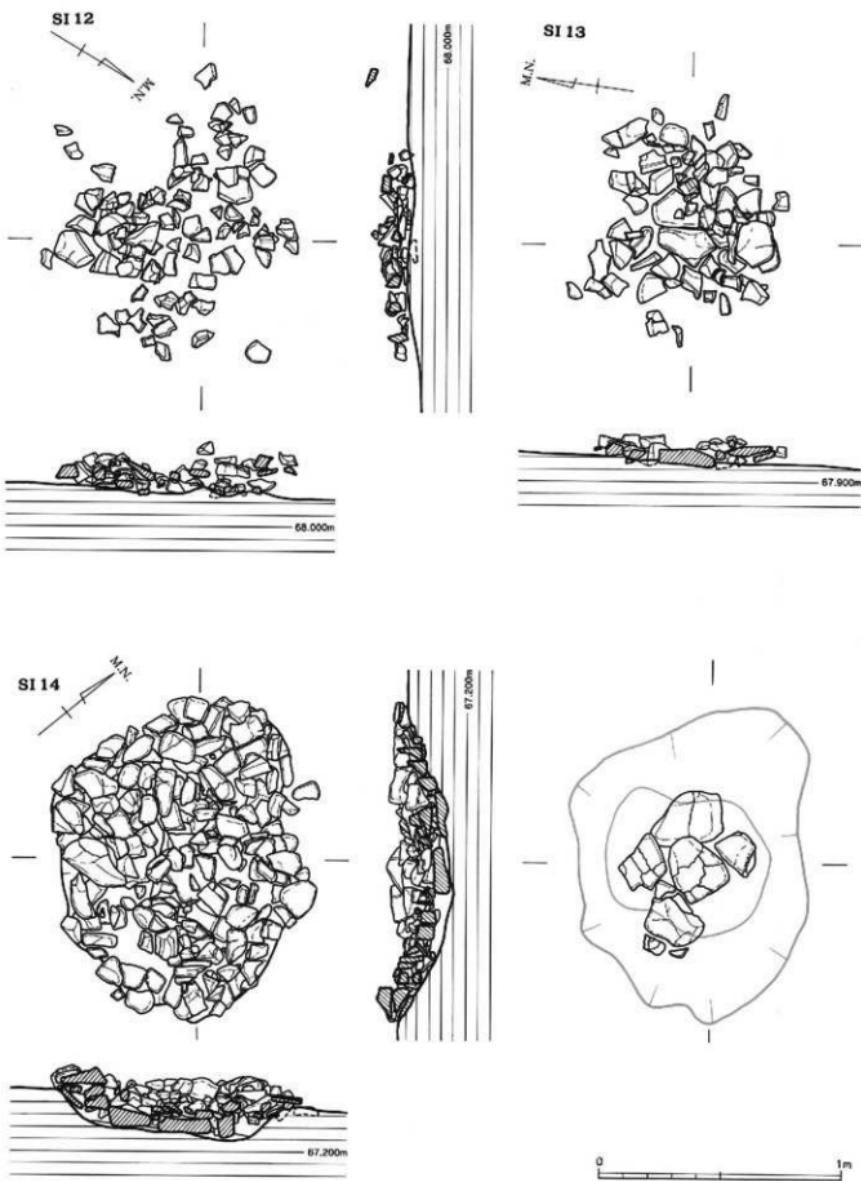
S I 9はB区中央西側、S I 8から南南東方向・約8m先に位置する。V層中で検出し、径0.7m×0.63m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑内上部及び土坑上面に、110個程度の礫が径1.4m×0.9mの範囲にややばらけた状態で集積する。礫は5cm～15cmの大きさの砂岩の扁平な円礫・角礫が利用されている。また礫はS I 8同様、土坑上面に集積する部分が比較的赤変し、周辺に向かって赤変の度合いが弱くなる。また炭化物は土坑上面や土坑内に少量みられた。

S I 10（第8図）

S I 10はB区中央西側、S I 9の北北西方向・約7mに位置する。また東方向・約0.3m先にS I 11が隣接する。V層下位で検出し、径0.58m×0.47m、深さ0.06mの楕円形を呈する凹み（土坑？）内に約40個の円礫・角礫がやや密に集積する。周辺にもばらけた状態で礫が見られる。礫は6cm～15cm程度の砂岩の円礫・角礫を使用し、全体的に赤変が著しく、6割以上が破碎している。炭化物はあまりみられない。また遺構内では塞ノ神式土器片（4）が出土している。



第8図 永ノ原遺跡 SI 9~11遺構実測図($S=1/20$) 及びSI 10出土遺物実測図($S=1/3$)



第9図 永ノ原遺跡 SI 12~14遺構実測図 (S=1/20)

S I 1 1 (第8図)

S I 1 1 はB区中央西側に位置し、西方向・約0.3m先にS I 1 0が隣接する。V層下位で検出し、径0.75×0.6mの範囲に5cm～15cm程度の砂岩の扁平な円碟・角碟（47個）が使用されている。南西側は比較的赤変が強いが、他はあまり赤変していない。また炭化物はあまりみられない。碟の断面形をみるとややレンズ状に集積しており、僅かに凹んだ部分を利用していたと考えられる。

S I 1 2 (第9図)

S I 1 2 はB区中央西側に位置し、南東方向・約4m先にS I 1 0・11が位置する。V層下位で検出し、径0.75×0.6mの範囲に5cm～15cm程度の砂岩の扁平な円碟・角碟（84個）がやや水平に集積されている。碟はあまり赤変は強くない。また掘り込みや炭化物はみられなかった。

S I 1 3 (第9図)

S I 1 3 はB区中央西寄りに位置する。V層下位で検出し、径0.9mの範囲に4cm～25cm程度の砂岩の扁平な円碟・角碟（76個）がやや水平に集積されている。碟は全体にまんべんなく赤変し、破碎碟も多い。掘り込みや炭化物はみられなかった。

S I 1 4 (第9図)

S I 1 4 はB区中央東側に位置し、VI層中で検出している。径1.3m×0.94m、深さ0.2mの略楕円形を呈する土坑内上部及び土坑上面に、215個の碟がかなり密な状態で集積する。碟は土坑の中央部、底面で約20cm～30cm程度の大きな扁平な碟を5個敷き、その上には6～25cm前後の扁平な碟や角碟が利用されている。碟は比較的赤変が著しく、遺構縁辺もしくは底面付近には黒変した碟もみられる。土坑底面付近で炭化物が少量みられた。

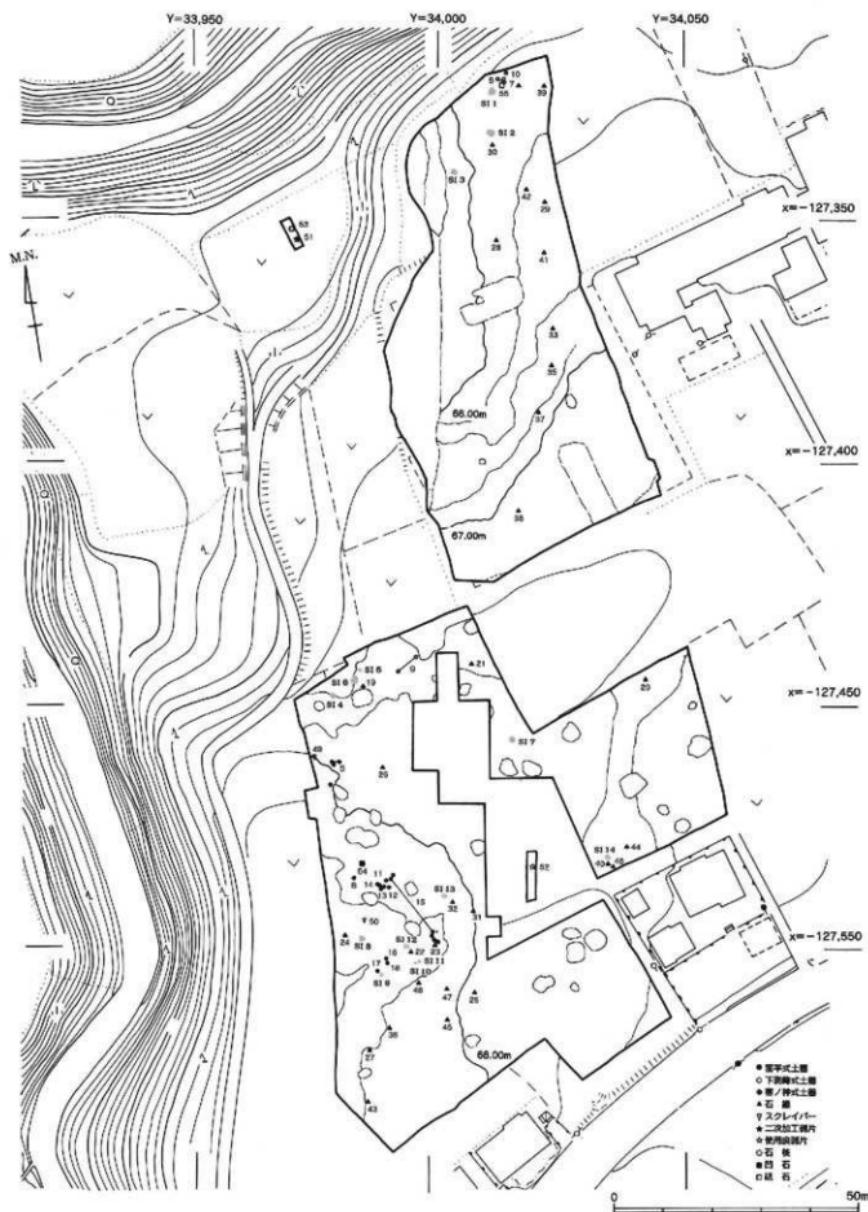
(2) 遺 物

土 器 (第8・11図)

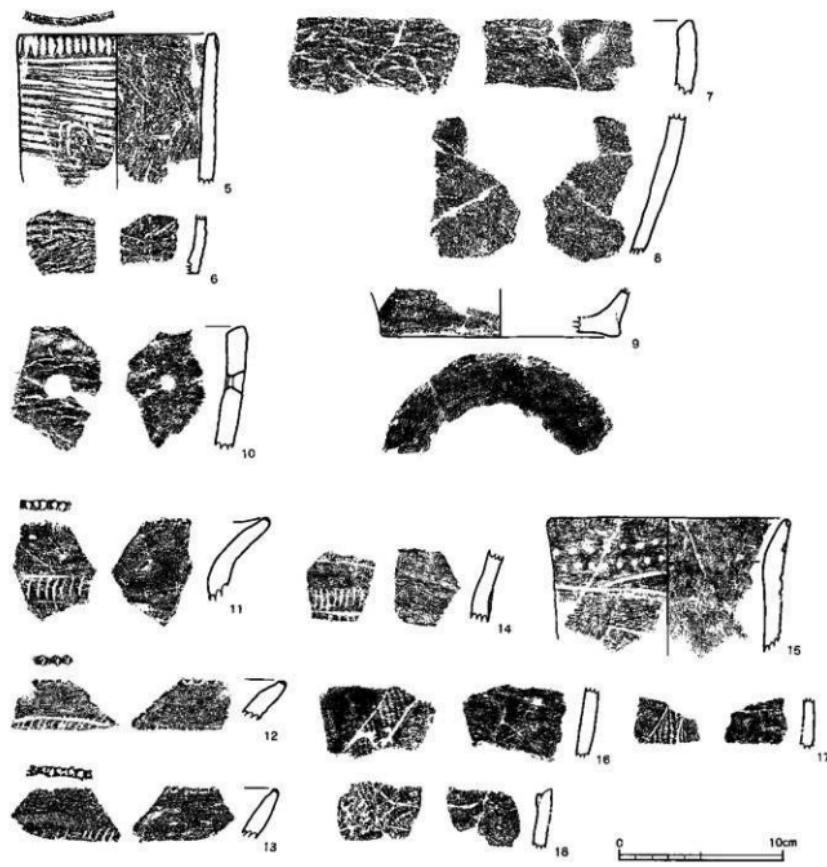
縄文時代早期の土器は、V層下部～VI層にかけて出土している。調査面積に比して分布密度がかなり低く、わずか80点程度の出土である。その大半が同一個体やその可能性があり、少なくとも6個体程度になりそうである。土器は前平式土器（5・6）、下剥峰式土器（7～10）、塞ノ神式土器（11～18）が出土し、前平式土器がB区北西端で、また下剥峰式土器がA区北側、塞ノ神式土器がB区西側中央にそれぞれが出土し、その分布域が異なる。またそれらの出土層位は、前平式土器及び下剥峰式土器はVI層中位～下位に集中し、塞ノ神式土器はV層下部からVI層上位にかけて出土している。また土器の大きさは全体的に小型のものが多い傾向にある。以下個体別に触れていいきたい。

前平式土器（5・6）

5・6は同一個体で、胴部が張らず、口縁が直口する器形である。口唇部に押圧刻みや口縁端部に1列の押圧文が施されている。またその下位には、斜位の貝殻条痕文を施文後、その上に同工具により上下逆「し」字状の沈線文を施しており、留ヶ宇土遺跡（串間市）でもその類例がみられる。内面にはケズリ調整が施されている。



第10図 永ノ原遺跡 縄文時代早期遺物分布図 (S=1/1,000)



第11図 永ノ原遺跡 織文時代早期土器実測図 (S=1/3)

下剥峰式土器 (7~10)

7~8・10はA区北側端で出土し、9は南に約1.2m離れたB区北側端で出土している。これらは同一個体で、器形は胴部がやや膨らみながら、口縁部が若干内湾し、口唇部が内傾する。口縁部は胴部と比べ、若干肥厚しているようである。外面には貝殻腹縁による横位の刺突を連続で施されている。器面には外面の大半にナデ調整がみられ、外面底部及び内面、底面にはミガキ調整が認められる。また10には補修孔が穿たれている。

表2 水ノ原遺跡 満文時代早期土器観察表

番号	出土位置	層位	断面	文様	調査	色 調	地の特徴		備考	
							外面	内面		
4	B区 S110	Ⅳ 基盤部	口縁部 底部	波綱文・熱文	内面偏 ナデ	灰青色 灰	に赤い 斑点	1mm以下の黑色、明光沢、2mm以下の黒色、 透明光沢板、白色砂粒を含む	底ノ神式	
5	B区 C16	V 基盤部	口縁部 底部	口縁部にへラ状工具による押圧刻み 内面に波綱文による押圧刻み	外面 内面	共組条文 ヘラマズリ	明光沢 板	に赤い 斑点	1mm以下の黒色、薄褐色、黑色光沢板、 1.5mm以下の白色透明な砂粒を含む	南字式 4と同一器体
6	B区 D18	V 基盤部			外面 内面	横・斜方向の 其他条文 ヘラマズリ	明光沢 板	に赤い 斑点	黒褐色を黑色光沢板、1mm以下の黒色、薄褐色 砂粒、1.5mm以下の白色透明な砂粒を含む	斜平式 5と同一器
7	A区 G2	V 基盤部		横方向の器具状工具による連續刺突文	外面 内面	ナデ ヘラミガキ	に赤い 斑点	に赤い 斑点	3mm以下の金色、乳白色、透明の光沢板を含む	下溝縫式 内曲面に波綱文
8	A区 G2	V 基盤部		横方向の器具状工具による連續刺突文	外面 内面	ナデ ナデ	に赤い 斑点	に赤い 斑点	3mm以下の金色、乳白色、透明の光沢板を含む	下溝縫式 内曲面に波綱文
9	B区 E14	V 基盤部		横方向の器具状工具による連續刺突文	外面 内面	ナデ ヘラミガキ	に赤い 斑点	に赤い 斑点	1.5mm以下の淡黄色光沢板、2mm以下の金色光沢 板、3mm以下の白色光沢板を含む	下溝縫式 5・6と同一器
10	AM G2	V 基盤部			外面 内面	ミガキ ナデ ヘラミガキ	に赤い 斑点	暗赤色	1.5mm以下の淡黄色光沢板、不透明な光沢 板、2mm以下の金色、乳白色砂粒を含む	下溝縫式 5・6と同一器
11	B区 D18	V 口縁部	口縁部にへラ状工具による押圧刻み 底部にへラ状工具による連續刺突文・横・花綱文	外面 内面	ヨコナデ ヨコナデ	黄 黄	斑点	3mm以下の淡黄色光沢板、白色光沢板、 白色砂粒、5mm以下のに赤い斑点を含む	底ノ神式 内面にスス付有	
12	B区 D18	V 口縁部	口縁部にへラ状工具による押圧刻み 底部にへラ状工具による連續刺突文・刺突の 横にヒビ彫	外面 内面	ナデ ヨコナデ	黄 黄	斑点	1mm以下の黑色光沢板、白色不透明板、白色 砂粒を含む	底ノ神式	
13	B区 D18	V 口縁部	口縁部にへラ状工具による押圧刻み 底部にへラ状工具による連續刺突文	外面 内面	ヨコナデ ヨコナデ	黄 黄	斑点	1mm以下の黑色、白色透明光沢板、白色不透明 砂粒、3mm以下のに赤い斑点を含む	底ノ神式	
14	B区 D18	V 口縁部	口縁部にへラ状工具による小2次状の連續刺突文 内面に波綱文	外面 内面	ナデ 波綱文	波 波	斑点	黒褐色を黑色、黒色砂粒、1mm以下の白色透明 板、黑色光沢板を含む	底ノ神式 内面の輪郭が壊しい	
15	B区 E18 E19	V 口縁部	口縁部にへラ状工具による押圧刻み 口縁部にへラ状工具による2段の連續刺突文、そ の下に波綱文、底部に波綱文による波綱面に熱文	外面 内面	ナデ 斜方向のナデ	波 波	斑点	0.5mm以下の淡黄色光沢板、1.5mm以下の黑色光沢 板、2mm以下の黑色光沢板を含む	底ノ神式	
16	B区 D20	V 基盤部	波綱文による繩文	外面 内面	ナデ ナデ	波 波	斑点	0.5mm以下の淡黄色光沢板、1mm以下の金色光沢 板、無光澤板を含む	底ノ神式 17・18と同一器か?	
17	B区 D20	V 基盤部	波綱文による繩文	外面 内面	ナデ 横方向のナデ	波 波	斑点	0.5mm以下の淡黄色光沢板、1mm以下の黑色光沢 板、2mm以下の黑色光沢板を含む	底ノ神式 16・17と同一器か?	
18	B区 D20	V 基盤部	波綱文による繩文（一部、波綱文外に純文）	外面 内面	ナデ 波綱文	波 波	斑点	0.5mm以下の淡黄色光沢板、1mm以下の黑色、無光澤 板、無光澤板を含む	底ノ神式 波綱文外に純文 16・17と同一器か?	

塞ノ神式土器（4・11～18）

11～13は口縁部で頸部がくびれ、口縁部が大きく開く器形になると思われる。文様は口唇部には押圧刻み、頸部付近に半截竹管？のようなもので連続刺突（爪形）文が施されている。そのうち11・12は連続刺突文を施文後、沈線を施している。このような爪形文が入るタイプは大貫貝塚（延岡市）や白ヶ野遺跡（清武町）でもみられる。14は頸部片である。11～13と比べ、頸部のくびれが弱い。文様は11・12と同様、刺突文と沈線文を組み合わせている。15は胴部はあまり張らず、口縁部がやや外反する。口縁部内面には屈曲が認められ、稜を有している。文様は口唇部にへラ状工具と思われる押圧刻みやその下位に竹管状工具による2段の連続刺突文が施されている。また胴部には区画された沈線文間に撲糸が充填されている。内面にはケズリ調整が行なわれている。4・16～18は胴部片である。そのうち、16・17は棒状の工具による沈線文で区画を行ない、その区画内に繩文が施されている。それらに対し、18の文様構成は前者と同様だが、繩文を区画する際に右側の沈線は棒状工具で描いているが、左側のものには撲った糸？を押し付けて区画を作り出している。

石 器 (第10・12・13図)

縄文時代早期の石器は、134点と土器同様、出土量が少なく、散漫な状態で出土している。その内訳は石鎚32点、スクレイバー2点、二次加工剥片8点、使用痕剥片2点、剥片・碎片137点、石核2点、凹石1点、砥石3点、原石2点である。また利用石材については、8種類あり、多い順より黒曜石100点（うち姫島産のものが79点）、頁岩27点、チャート22点、砂岩18点、流紋岩12点、珪質頁岩6点、緑色珪岩2点、石英2点になる。これらのうち、剥片・碎片、原石以外のものを中心にして37点図化している。以下、器種別に説明を加えていきたい。なお、実測図掲載分のみ第10図に位置を示している。

石 鎚 (3・19~48)

32点（遺構内1点、遺構外31点）出土し、そのうち31点を図化した。石材では黒曜石が17点と約半数を占め、以下、チャート（6点）、流紋岩（3点）、頁岩（3点）、珪質頁岩（1点）、緑色珪岩（1点）、石英（1点）が利用されている。平面形は二等辺三角形のものが大半を占め、その中でも、平基のもの（19）や、わずかに内湾の（20~23）、浅い抉りを持つもの（24~36）、抉りの深いもの（抉りの深さが最大長の1/4を超えるもの。3・37~45）に細分出来る。

そのうち、わずかに内湾するものや浅い抉りをもつものについては抉りが弧状を呈し、脚部が細く尖るものが多く認められる。また34・35のように先端から胴部にかけて膨らみ、脚部が外側に突出するタイプのものもみられる。

また抉りの深いものについては、側縁が直線的に作り出され、脚部は太く角張るか丸みのあるものが多い。抉りはU字形になるもののがほとんどである。

その他、46は正三角形を呈し、U字形の深い抉りを持つ。47は胴部両側縁と基部に抉りをもつ。脚端は欠損しているが、おそらく角張るように加工が施されていたものと考えられる。48は右脚部分が欠損し、その部分に再加工が施されている。おそらく製作途中のアクシデントによるものと考えられる。

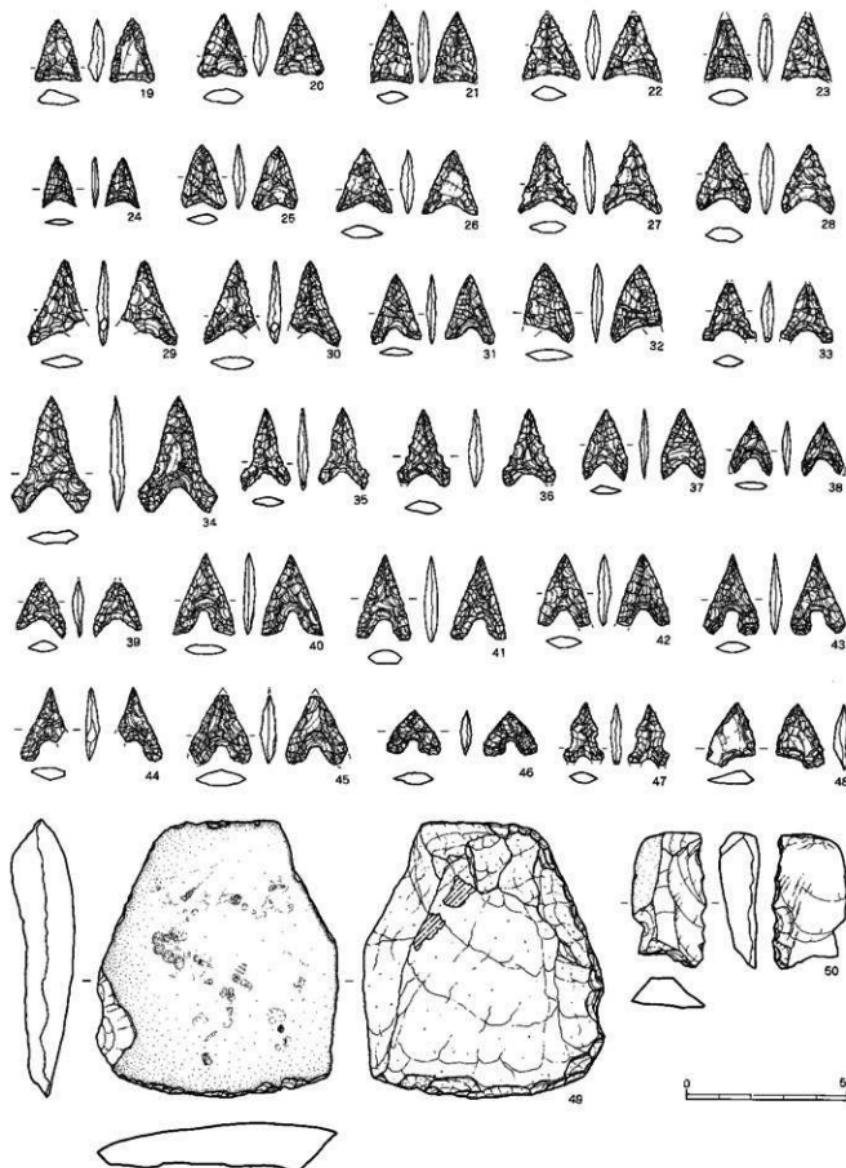
スクレイバー (49・50)

2点出土し、いずれもB区で確認されている。49は表面に自然面を有する幅広の剥片を素材に下縁部及び左側縁に加工を施し、刃部を形成している。砂岩製である。50は断面台形状を呈する縱長剥片を素材に、右側縁の裏面に粗い加工が施されている。流紋岩製で、52と同一母岩である。
二次加工剥片 (51)

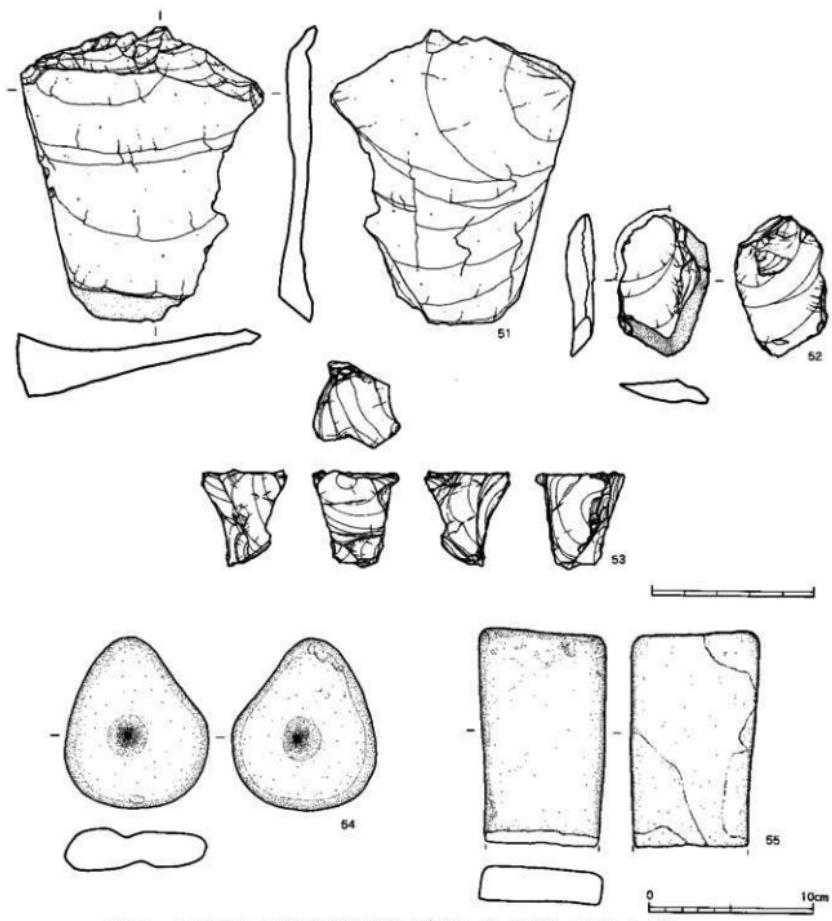
8点出土し、そのほとんどがB区で確認されている。利用石材は黒曜石1点、流紋岩1点、チャート1点、砂岩1点、頁岩3点、緑色珪岩1点である。51は幅広の剥片の一端に粗い加工を施している。砂岩製である。

使用痕剥片 (52)

3点出土し、いずれもB区で確認されている。石材は流紋岩や砂岩、頁岩を利用している。そのうち、52は小型で長方形に近い形状の剥片の左側縁上半に使用痕が認められる。



第12図 永／原遺跡 紹文時代早期石器実測図 (S=2/3)



第13図 永ノ原遺跡 繩文時代早期石器実測図(2)(51~53··S=2/3、54·55··S=1/3)

石核(53)

2点の出土で、B区及びC区(T 1)で出土している。石材はチャートと黒曜石(姫島産)を利用している。そのうち、掲載している53は残核である。分割礫を素材とし、打面を頻繁に転位しながら、連続して剥片を剥出した後、最終的に打面を上面に移し、正面にて幅広の剥片を剥出している。

表3 永ノ原遺跡 獄文時代早期石器計測表

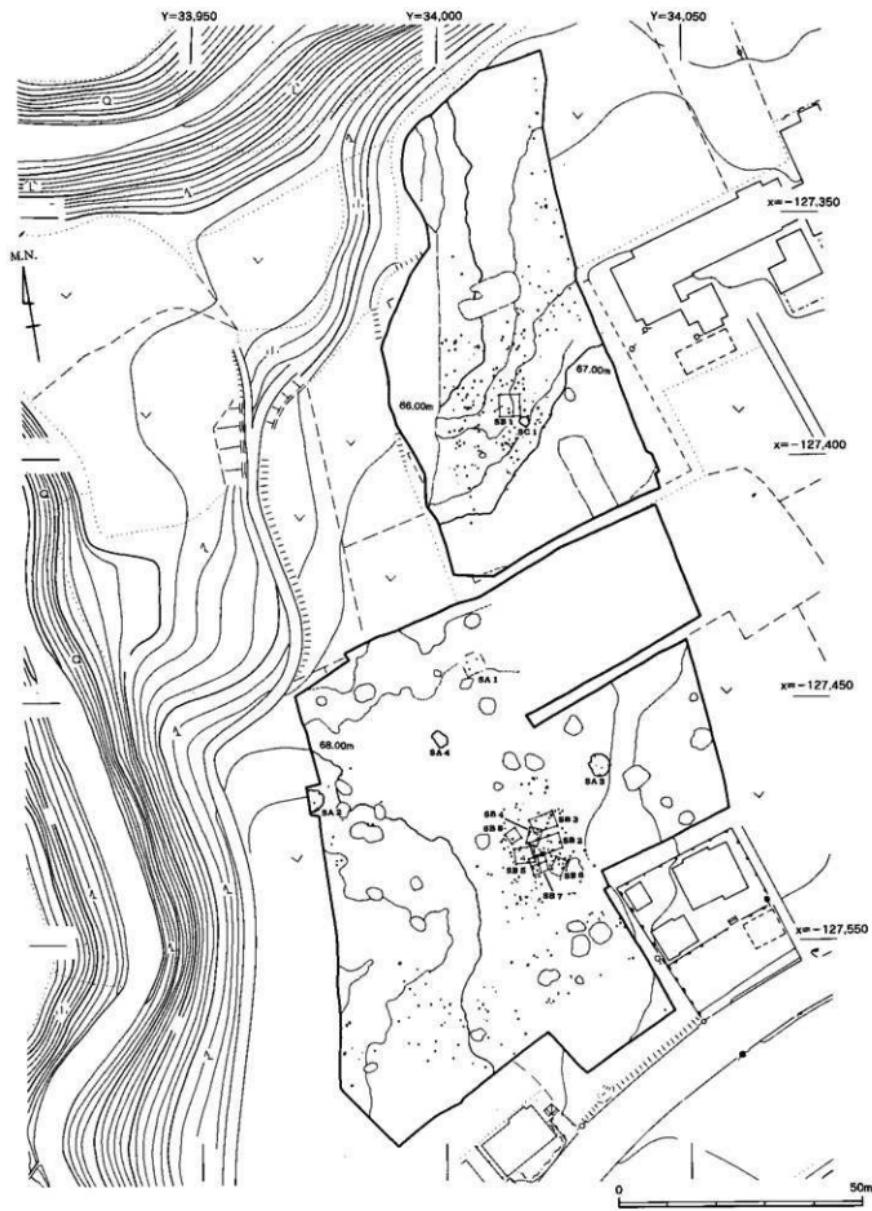
番号	出土位置	層位	器種	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
3	B区・S14	VII	石錐	1.47	1.45	0.48	0.4	チャート	
19	B区・D14	VII	石錐	1.93	1.39	0.46	0.8	頁岩	
20	B区・J14	VII	石錐	1.96	1.53	0.42	0.8	頁岩	
21	B区・F14	VII	石錐	2.21	1.28	0.31	(0.6)	黒曜石(桑ノ木津留産)	一部欠損
22	B区・D20	VII	石錐	(1.91)	1.52	0.48	(0.9)	流紋岩	先端部欠損
23	B区・E19	VII	石錐	2.2	1.75	0.4	0.9	黒曜石(姫島産)	
24	B区・D19	VII	石錐	1.58	1.01	0.21	0.2	黒曜石(桑ノ木津留産)	
25	B区・F20	VII	石錐	1.95	1.41	0.39	0.6	黒曜石(姫島産)	
26	B区・D16	VII	石錐	1.97	1.71	0.38	0.7	流紋岩	
27	B区・D22	VII	石錐	2.2	1.82	0.37	(0.7)	流紋岩	一部欠損
28	A区・G5	VII	石錐	2.19	1.62	0.45	0.8	黒曜石(姫島産)	
29	A区・H4	VII	石錐	2.33	1.62	0.45	0.8	珪質頁岩	
30	A区・G3	VII	石錐	3.6	(1.6)	0.35	(0.8)	黒曜石	片脚欠損
31	B区・F19	VII	石錐	2.15	1.6	0.27	0.4	黒曜石(姫島産)	
32	B区・F19	VII	石錐	1.42	(1.55)	0.39	(0.9)	黒曜石	片脚欠損
33	A区・H7	VII	石錐	1.76	(1.68)	0.38	(0.4)	黒曜石(姫島産)	脚部一部欠損
34	A区・G2	VII	石錐	3.6	2.45	0.4	1.4	黒曜石(姫島産)	
35	A区・H7	VII	石錐	2.51	1.62	0.3	0.6	黒曜石(姫島産)	
36	B区・D21	VII	石錐	2.33	1.62	0.45	(0.8)	黒曜石	脚部一部欠損
37	A区・H8	VII	石錐	2.19	1.38	0.28	0.5	黒曜石	
38	A区・G11	VII	石錐	1.66	1.33	0.29	(0.2)	流紋岩	脚部一部欠損
39	A区・H2	VII	石錐	(1.7)	1.5	0.39	(0.5)	緑色珪質岩	先端部欠損
40	B区・I18	VII	石錐	2.55	1.89	0.34	1.2	チャート	
41	A区・H5	VII	石錐	2.55	1.69	0.41	1.1	チャート	
42	A区・G4	VII	石錐	2.2	(1.62)	0.36	(0.8)	チャート	脚部一部欠損
43	B区・D23	VII	石錐	2.5	1.7	0.34	0.8	チャート	
44	B区・I17	VII	石錐	2.29	(1.32)	0.4	(0.7)	チャート	片脚欠損
45	B区・F21	VII	石錐	2.12	1.9	0.49	1.3	頁岩	
46	B区・I18	VII	石錐	1.31	1.6	0.38	0.4	黒曜石	
47	B区・F20	VII	石錐	1.85	1.2	0.33	0.4	黒曜石(姫島産)	
48	B区・E20	VII	石錐	1.96	1.46	0.42	0.8	黒曜石(姫島産)	
49	B区・C16	VII	スクレイパー	8.55	7.4	1.85	109.6	砂岩	
50	B区・D19	VII	スクレイパー	4.2	2.27	1.25	10.7	流紋岩	
51	1T・C5	VII	二次加工剥片	9.1	7.5	2.06	81.9	砂岩	
52	B区・G18	VII	使用痕剥片	4.34	2.75	0.9	9.6	流紋岩	
53	1T・B5	VII	石核	2.95	2.7	2.6	14.2	黒曜石(姫島産)	
54	B区・D18	VII	凹石	10.65	8.85	2.65	332.5	砂岩	全体的に赤変
55	A区・G2	VII	砥石	13.5	7.85	2.15	446.4	砂岩	欠損

凹石(54)

1点のみで、B区西側で出土している。54は砂岩製で、卵形に近い形状の扁平碟を素材に表裏両面の中央に円形(表)・楕円形(裏)の凹みを有する。火を受けたためか、全体的に赤変している。

砥石(55)

3点(A区1点、B区2点)出土し、そのうち1点固化した。いずれも砂岩製である。そのうち55は長方形で扁平な碟を素材に、その表面にわずかに研磨痕が認められる。



第14図 永ノ原遺跡 IV b 層面検出遺構分布図 (S=1/1,000)

3 繩文時代前期・後期の遺物

繩文時代前期・後期の遺物はⅢ層及びⅣa層で出土している。ただし、Ⅲ層についてはA区で後期の土器がわずかに出土したのみで、その大半がB区西側のⅣa層で確認されたものである。また前期・後期遺物の出土レベルに上下関係はほとんどみられず、混在した状態で出土している。遺物は量的にも少なく、ここでは一括して説明していきたい。

土 器（第15図）

前期の土器は35点出土している。それらは森B式土器に比定出来るもので、微隆起状の貼付突帯が横方向に巡るもの（56・59）や縦位に施されるもの（57・58・60・61）がみられる。内面には貝殻条痕による調整やナデ調整が認められる。

後期と思われる土器は約90点出土している。62～65・68は口縁部片、66・67は胴部片である。そのうち62・63・65・66・67はやや太めの沈線文、64はやや細めの沈線文によって文様帶を構成している。沈線文はいずれも棒状工具により施文されている。65は波頂部の資料で、口唇部には押圧刻みが認められる。68は横位の短沈線を連続して施し、文様帶を構成している。

また時期不明の胴部片が約40点出土している。そのうち69・70の2点を図化した。どちらも、器面調整には貝殻条痕を施しているが、そのうち69はやや粗い調整を行なっている。

石 器（第16・17図）

石器はⅢ・Ⅳa層で29点出土している。前述のとおり、前期・後期の土器が混在する状況で出土しているため、時期ごとに明確に表せなかった。このことから、ここでは一括して説明していきたい。また、攪乱層や層位横転中で確認された石器（71～74・76～80・82～84・86～89）についても合わせて見ていきたい。

石 錐（71～79）

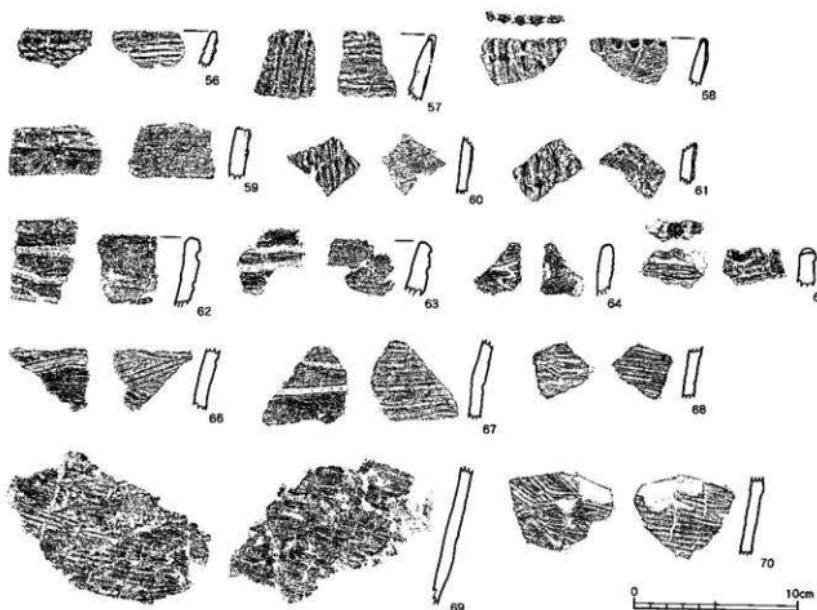
11点確認され、その内訳は包含層出土のものが3点、層位横転・攪乱層出土のものが8点である。そのうち8点（包含層出土1点、層位横転・攪乱層出土7点）図化した。利用石材は黒曜石3点、チャート3点（包含層）、流紋岩2点、頁岩2点、石英1点である。71～73・79のみ完形品で、残りは欠損品である。71・72は基部がわずかに内湾し、側縁部はやや膨らんでいる。73・74・76・77は基部に浅い抉りをもつもので、そのうち73・74・76は脚端が丸くなるように加工が施されている。75は側縁部が鋸歯状に仕上げられている。79は未製品の可能性があるもので、打面を基部側に置き、裏面に素材面を残し、周縁のみ加工が施されている。

石 匙（80）

1点のみの確認で、攪乱中からの出土である。80は小型で幅広の剥片を素材とし、両面からの加工より抉り部を作り出している。刃部に当たる部分は無加工である。砂岩製である。

スクレイバー（81・82）

2点の出土で、包含層 中のもの（81）と層位横転中のもの（Ⅳa層内、82）がある。ど



第15図 永ノ原遺跡 繩文時代前・後期土器測定図 (S=1/3)

表4 水ノ原遺跡 繩文時代前・後期土器観察表

番号	出土位置	層位	文様	調査	色 因		出土の特徴	備考
					外面	内面		
56	B区	Na	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	口部部 ナデ 内面 具経条痕文、ナデ	明黄褐色 に古い黃褐色	1 mm以下の暗色透明ガラス質砂粒、2 mm以下の 暗色砂粒を含む	縄文式
57	B区	Na	口 口端部	口部部～外縁にかけて横方向の輪郭切欠き文 内縁 二枚向の具経条痕文の後、ナデ	に古い黃褐色	に古い黃褐色	1 mm以下の黒褐色・無色透明ガラス質砂粒、1 mm以下の 黒色透明砂粒を含む	縄文式
58	B区	Na	口 口端部	口部部～外縁にかけて横方向の輪郭切欠き文 内縁 具経条痕文の後ナデ	に古い黃褐色 に古い黃褐色	1 mm以下の黒褐色・無色透明ガラス質砂粒、白色砂粒、黑色 透明光沢砂粒が混在する。	縄文式	
59	B区	Na	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	内縁 ナデ 内面 具経条痕文の後、ナデ	に古い黃褐色 に古い黃褐色	1 mm以下の黒褐色・無色透明ガラス質砂粒、1.5 mm以下の 黑色透明光沢砂粒	縄文式
60	B区	D22	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	内面 具経条痕文の後ナデ	に古い黃褐色	1 mm以下の暗色透明ガラス質砂粒、2 mm以下の 暗色不透明ガラス質砂粒を含む	縄文式
61	B区	D22	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	外縁 一端で具経条痕文 内縁 ナデ	に古い黃褐色	0.5 mm以下の黒褐色光沢砂粒、1 mm以下の 黒色透明光沢砂粒、1 mm以下の白褐色・褐色砂粒を含む	縄文式
62	B区	D22	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	外縁 ナデ 内縁 具経条痕文の後、ナデ	に古い黃褐色 に古い黃褐色	1 mm以下の黒褐色・無色透明ガラス質砂粒、1.5 mm以下の 黑色透明光沢砂粒	縄文式
63	B区	D22	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	外縁 ナデ 内縁 具経条痕文の後、ナデ	に古い黃褐色 に古い黃褐色	1 mm以下の黒褐色・無色透明ガラス質砂粒、1.5 mm以下の 黑色透明光沢砂粒	縄文式
64	B区	D22	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	外縁 ナデ 内縁 具経条痕文	に古い黃褐色 に古い黃褐色	1 mm以下の黒褐色・黑色光沢砂粒、1.5 mm以下の無色 透明光沢砂粒、黑色光沢砂粒、2 mm以下の褐色 ・乳白色砂粒の砂粒を含む	縄文式
65	B区	D22	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	外縁 具経条痕文の後、ナデ 内縁 具経条痕文	に古い黃褐色 に古い黃褐色	2 mm以下の暗色透明ガラス質砂粒を多く含み、・黑色 ガラス質砂粒を含む	縄文式
66	B区	D22	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	外縁 ナデ 内縁 具経条痕文の後、ナデ	に古い黃褐色 に古い黃褐色	2 mm以下の暗色透明・白色ガラス質砂粒、黑色・ 透明光沢砂粒を含む	縄文式
67	B区	D22	口 口端部	横方向の輪郭切欠き文	外縁 ナデ 内縁 具経条痕文の後、ナデ	に古い黃褐色 に古い黃褐色	2 mm以下の暗色透明・白色ガラス質砂粒、黑色・ 透明光沢砂粒を含む	縄文式
68	B区	D22	口 口端部	横方向に通続の斜辺切欠き文	外縁 具経条痕文 内縁 具経条痕文	に古い黃褐色 に古い黃褐色	0.5 mm以下の暗色透明・黑色光沢砂粒、2 mm以下の 暗色・白色砂粒を含む	縄文式
69	B区	D22	口 口端部	横方向に通続の斜辺切欠き文	外縁 具経条痕文 内縁 具経条痕文	に古い黃褐色 に古い黃褐色	1 mm以下の暗色透明ガラス質砂粒、1.5 mm以下の黒褐色 ・無色透明砂粒を含む	縄文式
70	B区	D22	口 口端部		外縁 具経条痕文 内縁 具経条痕文	に古い黃褐色 に古い黃褐色	1 mm以下の暗色透明砂粒、1.5 mm以下の乳白色 ・黑色砂粒を含む	縄文式 スッカ

ちらも砂岩製である。8 1 は幅広で厚みのある剥片の打面を横位に置き、主に裏面より加工を施すことで、弧状の刃部を作り上げている。8 2 は表面が3枚の剥離面から構成されている縦長剥片を素材とし、表面より右側縁に加工を施している。

楔形石器（8 3）

1点のみの確認で、攪乱層からの出土である。8 3 は縦長剥片を素材とし、上下両端に対向するように剥離痕が認められる。断面は紡錘形を成している。

二次加工剥片

包含層より4点（黒曜石製）確認されている。図化していないが、いずれも小型（不定形のものが多い）で、一端に不規則な加工を施している。

使用痕剥片（8 4）

2点確認され、包含層のもの（8 4）と攪乱層等のものが、それぞれ1点づつ出土している。利用石材は流紋岩と頁岩である。8 4 は碟面を打面とする不定形剥片の左側縁及び下縁に微細な剥離痕が観察される。

剥片（8 5）

4 1 点確認され、その内訳は包含層出土のものが2 9 点、攪乱層等の出土のものが6点である。利用石材は黒曜石1 2点（攪乱層中等3点）、砂岩1 5点（攪乱層中1点）、チャート6点（攪乱層中等2点）、頁岩2点（攪乱層中1点）、石英3点（攪乱層中2点）、凝灰岩2点（攪乱層中）、珪質頁岩1点（攪乱層中）である。形状もさまざままで、不定形のもの（8 5を含む）が多く、他に縦長のものや横長のもの幅広のもの等がみられる。

磨製石器（8 6）

1点出土（攪乱層）している。頭部に向かってやや窄まり、両側縁が「ハ」字状に開く形状で、左側縁は直線的であるのに対し、右側縁はやや外反している。断面形は長方形を呈し薄手である。全面に粗い研磨加工が施されている。下部にあたる部分は摩滅が顕著であり、刃部として使用されていた可能性もある。頁岩製である。

石錐（8 7～8 9）

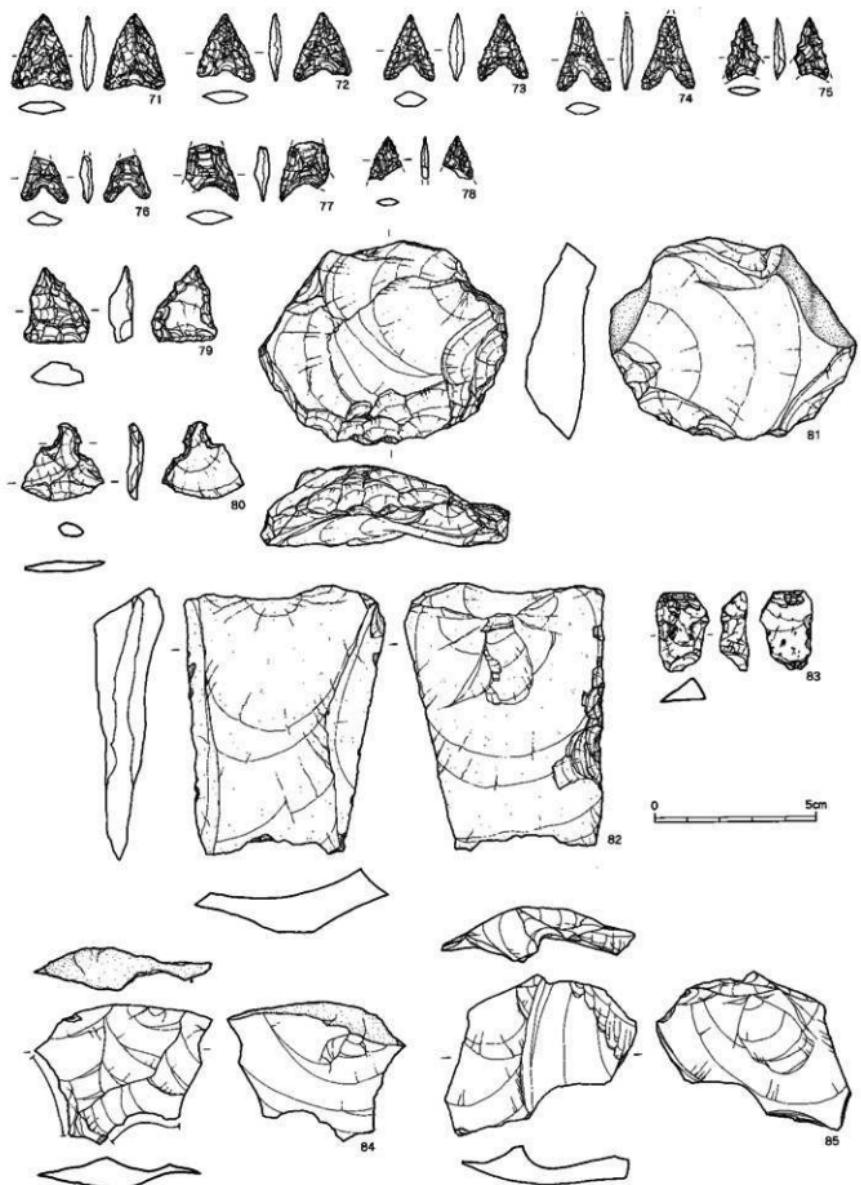
3点とも攪乱層より確認されている。利用石材は頁岩（8 7）と砂岩（8 8・8 9）である。8 7 は長軸方向に切り込みをいたれた「切目石錐」である。上端は欠損のため、裏面に切り込みの痕跡が残る。8 8・8 9 は「碟石錐」と呼ばれるもので、とも扁平な碟を利用し、その長軸方向に数回の加擊を行ない、抉りを作り出している。

碟器（9 0）

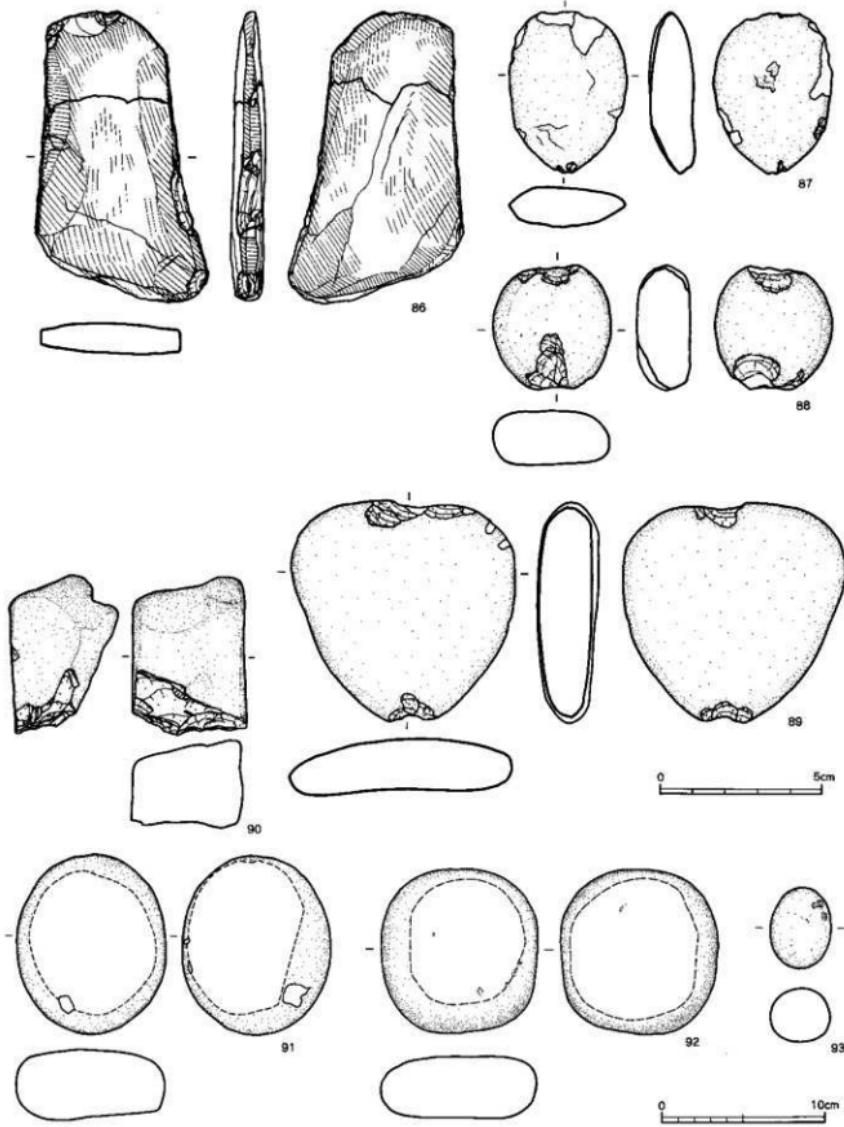
包含層より1点出土している。正面形が長方形を呈する比較的厚みのある砂岩の円碟の一端に、裏面より加工を施し、刃部を作り出している。

磨石（9 1～9 3）

包含層中より4点出土し、そのうち3点図化した。いずれも砂岩製で、そのうち9 1・9 2 は梢円形に近い扁平な碟を素材に、表裏両面に磨面を有する。9 3 は正面中央にわずかに磨痕が観察出来る。また右上部には敲打痕も認められる。



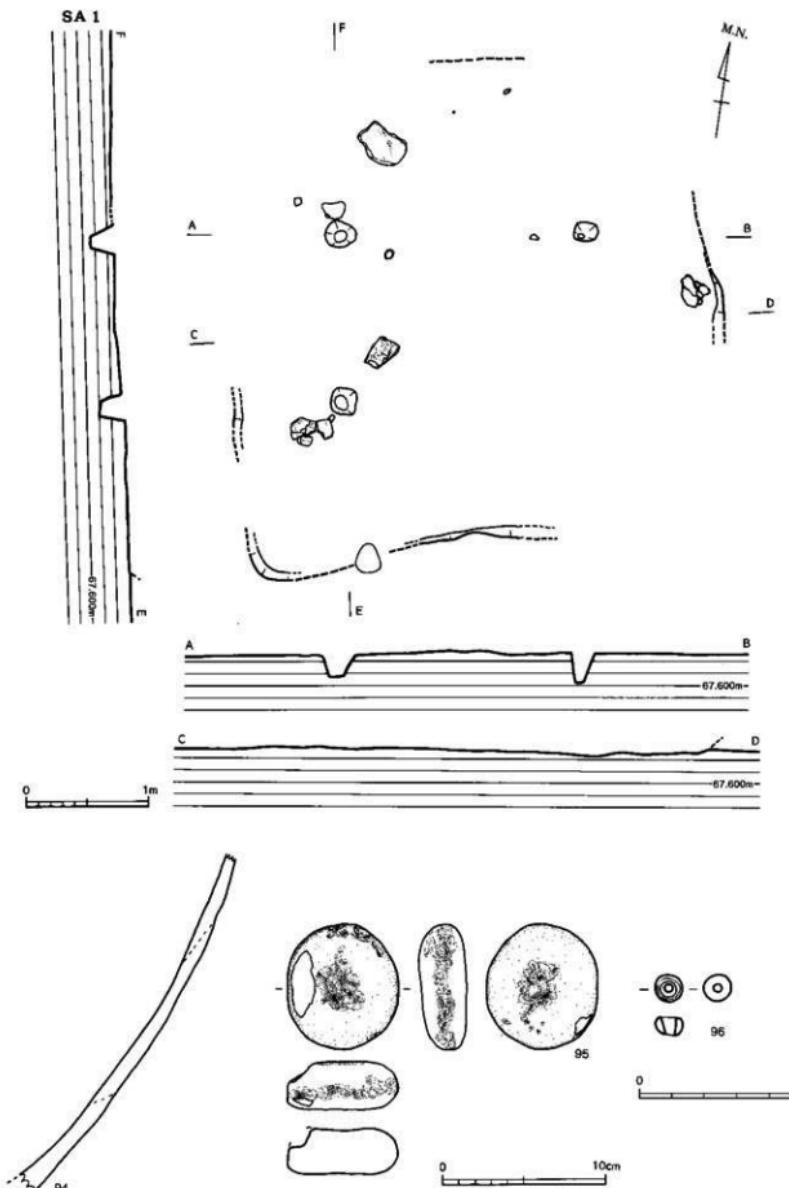
第16図 永ノ原遺跡 編文時代石器実測図 (S-2/3)



第17図 永ノ原遺跡 繩文時代石器実測図(2)(86~89···S=2/3、90~93···S=1/3)

表5 水ノ原遺跡 繩文時代石器計測表

番号	出土位置	層位	器種	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
71	A区	—	石 砧	2.32	1.9	0.4	1.4	流紋岩	
72	A区	—	石 砧	2.15	1.75	0.4	0.9	黒曜石	
73	A区	—	石 砧	2.06	1.5	0.41	0.7	頁岩	
74	B区・D19		石 砧	2.24	1.65	0.35	0.7	石英	層位横軸中
75	B区・D23	N/a	石 砧	(1.92)	(1.1)	0.35	(0.5)	チャート	開辟欠損
76	A区	—	石 砧	(1.46)	1.45	0.38	(0.3)	黒曜石(猿島産)	先端部欠損
77	—	—	石 砧	1.96	1.46	0.42	0.8	流紋岩	
78	B区	—	石 砧	(1.31)	(0.92)	(0.22)	(0.2)	黒曜石	先端部のみ残存
79	B区	—	石 砧	2.35	2	0.7	2.9	頁岩	未製品か?
80	B区	—	石 鋏	2.4	2.5	0.45	2	砂岩	
81	B区・D23	N/a	スクレイバー	6.3	7.6	2.4	108.2	砂岩	
82	B区	—	スクレイバー	8.25	6.28	2.2	73	砂岩	層位横軸中
83	B区	—	楔形石器	2.4	1.5	0.8	2.7	黒曜石	
84	B区	—	使用痕剥片	4.4	5.43	1.32	15	頁岩	
85	B区・E22	N/a	剝片	4.93	5.95	1.62	15.4	頁岩	
86	B区	—	磨製石器	8.8	5.25	1	66.8	頁岩	
87	B区	—	石 鋏	9.98	3.6	1.4	30.1	頁岩	
88	B区	—	石 鋏	3.82	3.6	1.65	34.5	砂岩	
89	B区	—	石 鋏	6.8	6.85	1.8	109.2	砂岩	
90	B区・D23	N/a	穀器	9.85	7.1	6.6	563.6	砂岩	
91	B区・D22	N/a	磨石	11.1	8.2	4.45	678	砂岩	
92	B区・D22	N/a	磨石	10.15	9.64	4.1	610.9	砂岩	
93	B区・D22	N/a	磨石	5	3.76	3.35	88.6	砂岩	敲打痕あり



第18図 永ノ原遺跡 SA 1 道構実測図(S=1/4) 及び出土遺物実測図(94-95-S=1/3、96-S=2/3)

4 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物

(1) 遺構

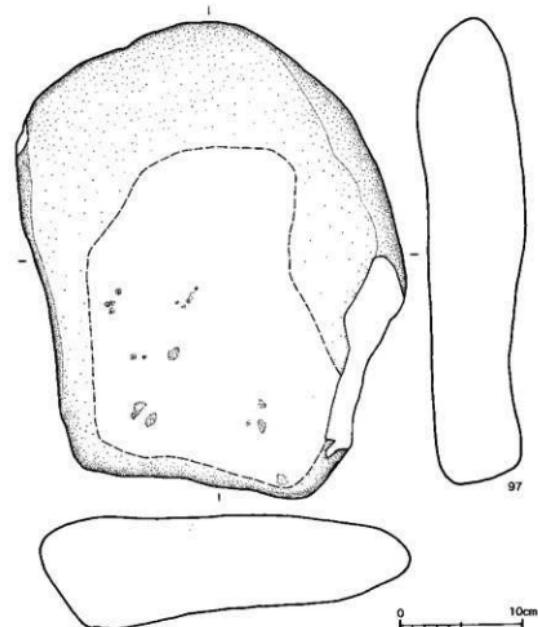
竪穴住居跡 (SA)

本遺跡では竪穴住居跡は4軒確認されている。そのうち弥生時代の所産と考えられるものが1軒である。

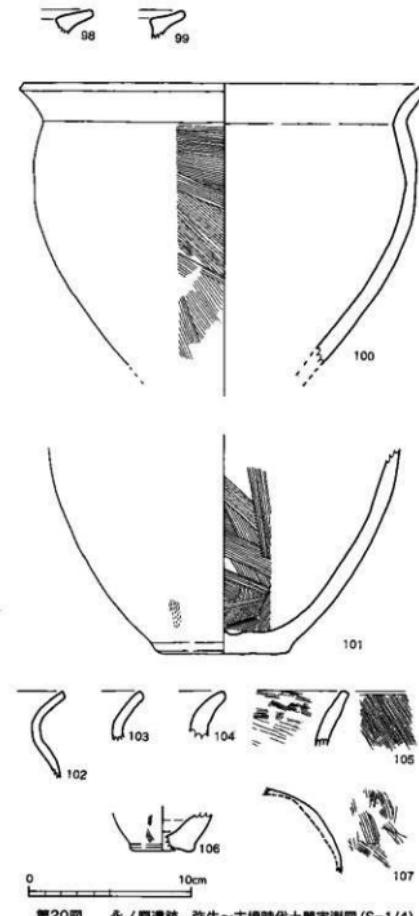
SA 1 (第6図)

SA 1はB区中央北側に位置する。この周辺は第IV b層まで削平を受けていたために遺構の残りが悪く、また遺構の南東側は試掘坑のために消失し、幸うじて側壁の一部と床面を検出している。およそ4m規模の方形プランを呈すると思われる。また遺構の深さは東壁で約5cm、南北壁隅で約3cmを測る。柱穴は3本確認し、径約20cm~25cm、深さは20cm前後を測る。柱穴間の距離は東西方向で約2m、南北方向で1.5mで、その配置より消失した南東側にも柱穴があった可能性がある。埋土は1層でやや硬質な黒褐色土である。

遺物は土器・石器合わせて30点確認され、その大半が床面に近い高さで出土している。土器は東壁中央で弥生土器の胴部片(94)、遺構北側で小片が数点確認されている。また石器は凹石(95)や台石(97)、玉(96)、その他黒曜石(姫島産)製の碎片等が確認されている。



第19図 永ノ原遺跡 SA 1出土遺物実測図(2) (S=1/4)



第20図 永ノ原遺跡 弥生～古墳時代土器実測図 (S=1/4)

94は壺の胴部片で、やや厚手である。器面には縦方向のハケ目調整の後、ナデ調整が施されている。95は砂岩製で、表裏両面中央や周縁に敲打痕が認められる。96は翡翠製で中央に片方からの穿孔が施されている。97は扁平な砂岩の円礫を素材とし、表面中央から手前にかけて磨痕がみられ、敲打痕も数カ所認められる。なお、玉や碎片については縄文時代の所産と考えられる。

(2) 遺物

弥生時代～古墳時代初頭にかけての遺物は約10点出土し、そのほとんどがA区のⅢ層中より出土している。ここでは、そのうちの10点について図示し、説明していく。

98・99は肥後系の壺の口縁部片で口縁部が強く外し、「L」字状を呈する。また口縁部内面には張り出しを持つ。100・101はB区で唯一確認された資料で、南東端に位置する層位横軸内(J-K 17グリット)出土で色調や胎土等の特徴より同一個体の可能性がある。100は口縁部から胴部、101は胴部から底部の資料で、口縁部に最大径をもち、頸部が「く」字状に外反し、明瞭な稜を持つ。胴部は上半が張り、器面にはハケ目調整が施されている。底部は平底である。102～105は口縁部の資料で、そのうち、105は内外面ともハケ目調整が施されている。106は壺の底部である。わずかに上げ底ぎみである。107は小形の壺の頸部付近～胴部の資料で、外面にはハケ目調整が施されている。なお、内面の調整は剥離のため不明である。

これらの土器の時期は、98～101は弥生時代中期末～後期初頭、103・104・106・107は弥生時代後期、102・105は弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。

表6 永ノ原遺跡 SA1出土遺物

番号	器種 部位	出土 位置	層位	法量(cm)			手法・調製・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底幅	器高	外面	内面	外面	内面		
94	裏 削部	B区 SA1	-	-	-	-	下方向にハケ目の後、ナデ ナデ		にぶい黄 黄灰	にぶい黄 黄灰	0.5mm以下の黒色・灰色・白色 砂粒・砂粒が多く含む、1mm程の 砂粒を含む	

番号	出土位置	層位	器種	計測値				石材	備考	
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
95	B区・SA1	-	凹石		9.75	8.8	2.98	207.1	砂岩	両面・周縁に敲打痕
96	B区・SA1	-	玉		0.85	0.87	0.6	0.5	翡翠	
97	B区・SA1	-	台石		39.1	31.7	8.1	15,000	砂岩	

表7 永ノ原遺跡 弥生時代～古墳時代出土土器觀察表

番号	出土 位置	層位	器種 部位	法量(cm)			手法・調製・文様ほか		色 調		胎土の特徴	備考
				口径	底幅	器高	外面	内面	外面	内面		
98	A区	II 口縁部					ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄 黄灰	にぶい黄 黄灰	1mm以下の黒色・白色砂粒・ 乳白色光沢粒・赤褐色粒を含む	
99	A区	II 口縁部					ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄 黄灰	にぶい黄 黄灰	3mm以下の暗褐色・無色透明 ガラス質粒を含む	
100	B区	- 口縁部 ～ 底部		24.6			斜方向にハケ日の後、ヨ コナデ 横・斜方向にハ ケ日	ヨコナデ	横	浅黄灰	0.5mm程の黒色光沢粒、1mm～ 2mm程の赤褐色・暗褐色の砂 粒を含む	101と同一個体か 層位換軸中出土
101	B区	- 裏 脛部 ～ 底部			7.2		ナデ、ハケ目	斜方向にハケ目	性	浅黄灰	1mm以下の無色透明・白色ガ ラス質粒、3mm以下の暗褐色 砂粒を含む	100と同一個体か 層位換軸中出土
102	A区	II 口縁部 ～ 削部					横方向のハケ日の後、ヨ コナデ 横・斜方向のハケ日	ハケ日調整の後、ヨコ ナデ、ナデ	にぶい赤褐	性	1mm～2mm程の褐色・黒色砂 粒を含む	
103	A区	II 口縁部					ナデ	ナデ	明晃	暗	1mm以下の無色透明・白色ガ ラス質粒、3mm以下の暗褐色 砂粒を含む	
104	A区	II 口縁部					ヨコナデ	調整不明	性	性	2mm以下の褐色砂粒を多く含む	風化が著しい
105	A区	II 口縁部					斜方向にハケ目	横・斜方向のハケ日の 後、ナデ	にぶい棕	にぶい棕	1mm以下の白色ガラス質粒、 2mm以下の明赤褐色砂粒、5 mm以下の暗褐色砂粒	
106	A区	II 底部		3.5			ハケ目	調整不明	性	性	1mm以下の無色透明・不透明 なガラス質粒、3mm以下の褐 色・黑色砂粒	
107	A区	II 脣部					ハケ目・ナデ	調整不明	にぶい黄 黄灰	明黄褐	1～3mmの褐色砂粒を含む	

5 その他の遺構・遺物

(1) 遺構

これまで掲載してきた遺構以外にも、堅穴住居3軒や掘立柱建物跡8棟、土坑1基、柱穴群が確認されている。いずれもIVb層より上層で構築されたものだが、これらは遺構内で遺物の出土が無かったものや出土した遺物が時期確定するのに困難なこと等の理由より時期不明として扱った。以下種別ごとに紹介していきたい。

堅穴住居（SA）

SA2（第21図）

SA2はB区西端に位置し、IVb層上面で検出している。西側が調査区外のため、約半分を確認するに留まつたが、径が約4.5m規模の円形プランを呈すると考えられ、検出面から床面の深さは約15cmを測る。さらに床面中央部、径3.5mの範囲で緩やか凹み、床面より深いところで約20cm低くなる。その中には土坑と柱穴が確認されている。土坑は1.5前後の方形もしくは長方形プランにならうか。深さは北壁で約25cm、南壁で約15を測る。また柱穴は中央のもの以外に北東壁際と南壁際が確認され、径30cm～50cmとばらつきがみられるが、そのほとんどが約25cmの深さを測る。埋土は大きく3層（黄褐色土・褐色土・暗褐色土）に分層出来、レンズ状に堆積している。遺物は縄文土器片が数点出土しているが、小片のため図化していない。

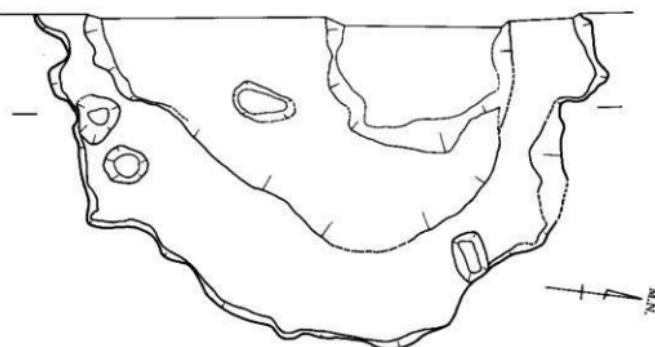
SA3（第21・22図）

SA3はB区中央西寄りに位置し、IVb層上面で検出している。径4.5m×3.5mの略楕円形プランを呈し、検出面からの深さは約50cm、床面積11.44m²を測る。北側にはテラスが確認されることから建て替えの可能性も考えられたが、埋土では確認出来なかった。柱穴は5本確認されていており、そのうち中央の2本が主柱穴と考えられる。主柱穴は径が約20cm～30cm、深さ10cm～15cm、柱穴間は2.2mを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、3層に分層出来る。遺物は縄文土器片（108）や使用痕剥片（110）、剥片（109）等が出土しており、110が床面より約15cm浮いた状態で確認された以外は30cm以上浮いていた。108は胴部片で、器面に撚糸文が施されている。110は砂岩製の使用痕剥片である。表面に礫面を大きく残す縦長剥片の右側縁に微少剥離痕が認められる。なお、先端部は欠損している。

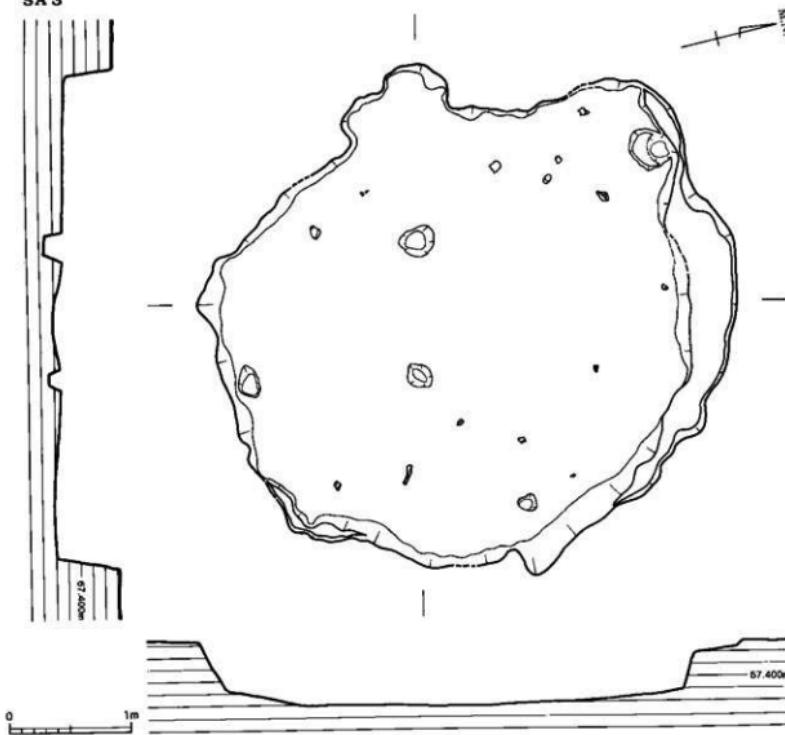
SA4（第23図）

SA4はB区北側に位置し、IVb層上面で検出している。なお北東方向に約13m離れた場所にSA1がある。3.2m×2.1mの長方形プランを呈し、検出面からの深さ約15cm、床面積5.3m²を測る。南壁際で柱穴が2本確認されているが、深さ約10cmと浅く、遺構に伴うかは不明である。遺物は砂岩製の台石が4点確認されている。そのうち3点（111・112・113）は遺構中央から南西壁かけて、1点は西壁際でいずれも床面直上で出土している。台石は長径約40cm・重さ約1.5～2.6kg規模で112は両面、それ以外は片面に磨痕が残されている。また113の裏面には敲打痕が観察される。

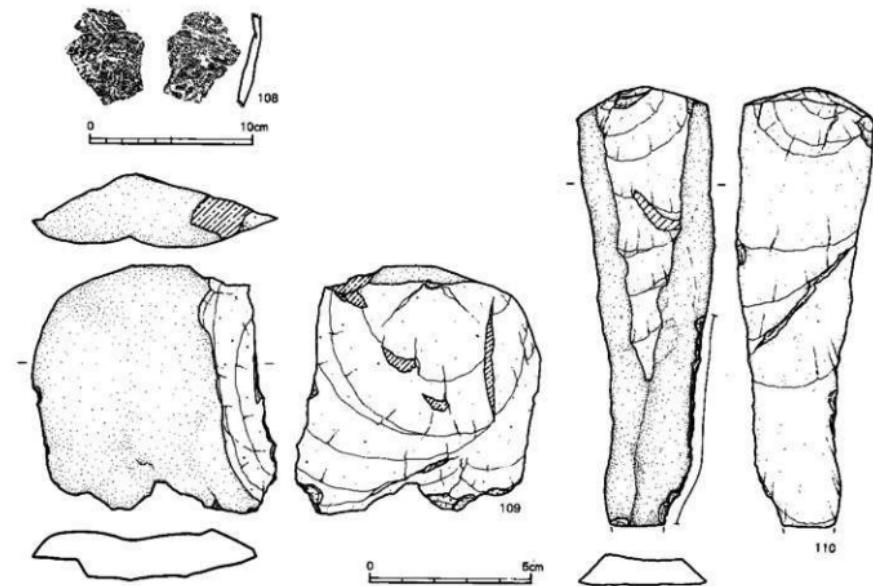
SA 2



SA 3



第21図 永ノ原温泉 SA 2・3縦横実測図 ($S=1/40$)



第22図 永ノ原遺跡 SA 3出土遺物実測図 (108--S=1/3、109・110--S=2/3)

表8 永ノ原遺跡 SA 3出土遺物観察表

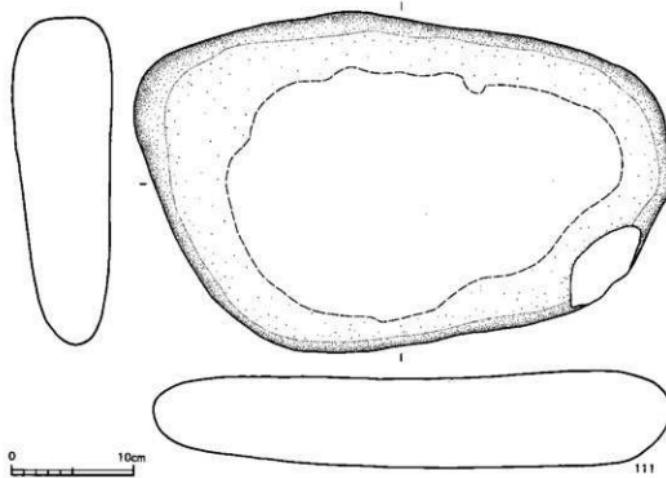
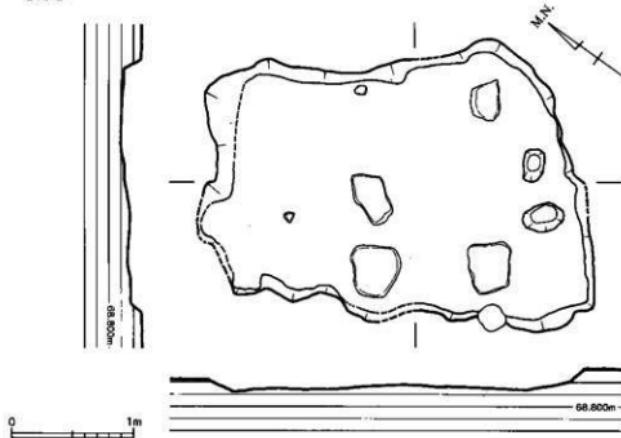
番号	出土位置	層位	器種	文様	調査	色調		地土の特徴	備考
						外面	内面		
108	B区 SA 3	-	器形	西本文		外面 ナメ 内面 無底の後ナメ	に赤い朱痕 に赤い青痕	0.5mm以下の細毛、透明玉斑紋、1mm以上の黒色瓦状紋、2mm以下の褐色、暗褐色砂粒、4mm以下 の波状色帶紋。	

番号	出土位置	層位	器種	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
109	B区・SA 3	-	調片	8.61	8.52	2.08	97.1	砂岩	
110	B区・SA 3	-	使用痕調片	13.5	4.25	1.2	73.3	砂岩	

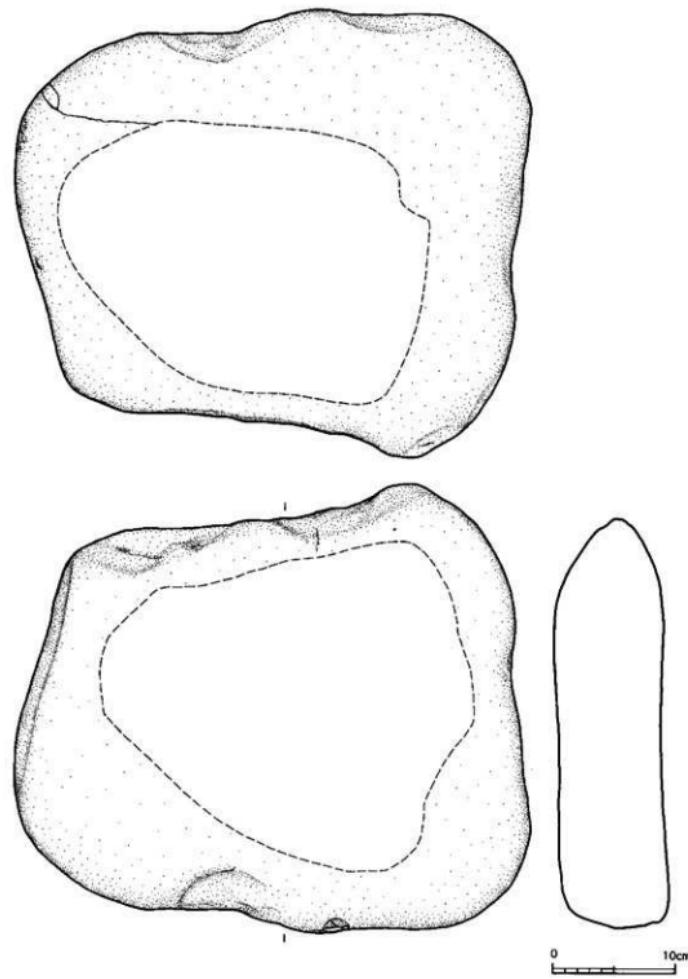
表9 永ノ原遺跡 SA 4出土遺物観察表

番号	出土位置	層位	器種	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
111	A区・SA 4	-	台石	42.15	28.5	8.55	15,000	砂岩	
112	A区・SA 4	-	台石	40.9	41.1	10.7	26,000	砂岩	
113	A区・SA 4	-	台石	40	37	10.3	25,000	砂岩	

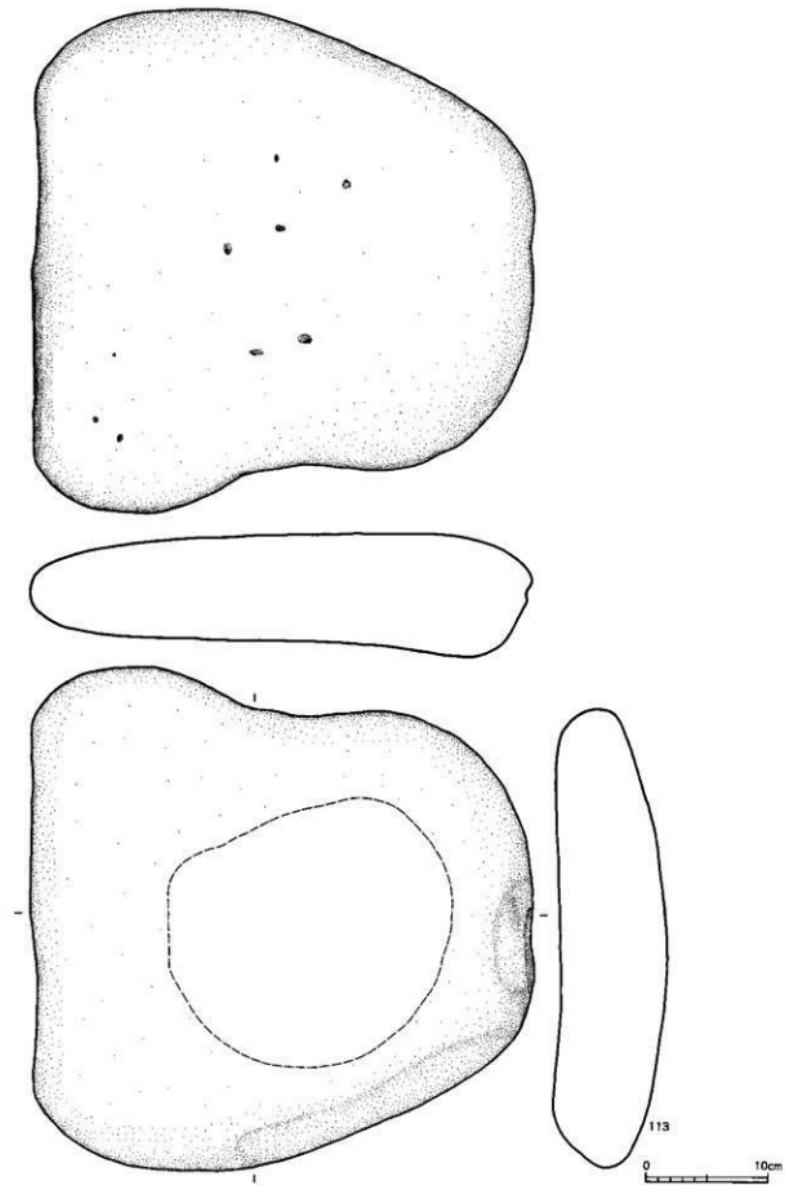
SA 4



第23図 永ノ原遺跡 SA 4遺構実測図 ($S=1/40$) 及び SA 4出土遺物実測図 ($S=1/4$)



第24図 永ノ原遺跡 SA 4出土遺物実測図(2)(S=1/4)



第25図 永ノ原遺跡 SA 4出土遺物実測図(3) (S=1/4)

掘立柱建物跡（SB）

本遺跡ではピット群が3箇所（A区1・B区2）で確認されている。そのうちA区では調査区中央から南側にかけて集中し、またB区では中央と南西側にそれぞれ集中箇所がみられた。ピットには3種類（黄褐色土・黒褐色・高原スコリアを含む黒褐色土）の埋土が認められ、そのうち掘立柱建物跡と認定されたものすべてに黒褐色土が堆積していた。

掘立柱建物跡は8棟（A区1棟・B区7棟）確認されている。建物の規模は1間×1間や1間×2間、1間×3間、2間×2間などがある。特にB区では建物跡が集中し、そのほとんどが切り合い関係にあり、少なくとも最低4回の建て替えが想定出来る。出土遺物についてはいずれも確認されていない。以下、個別に説明していきたい。

SB1（第26図）

SB1はA区中央南側に位置し、検出をIVb層上面で行った。建物の形状は1間×3間を呈する長方形となり、梁行が約4.3m、桁行は東列が4.71m（柱間寸法が北より1.5m+1.46m+1.75m）、西列が4.44m（柱間寸法が北より1.85m+0.9m+1.69m）を測る。建物自体の主軸方位はN-7°-Eに採り、敷地面積は19.85m²である。柱穴の形状はそのほとんどが不正楕円形を呈し、その規模は径12cm~22cm、検出面からの深さは5cm~38cmと一定ではない。埋土は黒褐色土が堆積し、遺物の出土はみられなかった。

SB2（第26図）

SB2はB区中央に位置し、IVb層上面で検出している。遺構北西側でSB4、西側でSB5、南西側でSB7と重複関係にあるが、柱穴の切り合い関係は認められない。建物は2間×3間を呈する長方形となり、梁行が東列が3.18m（柱間寸法が北より2.1m+1.08m）、西列は3.42m（柱間寸法が北より2.05m+1.37m）、桁行は北列が5.95m（柱間寸法が東より2.2m+2.2m+1.55m）、南列が6.26m（柱間寸法が東より2.1m+2.3m+1.86m）を測る。建物の主軸方位はN-11.5°-Eに採り、敷地面積は21.6m²である。柱穴の形状は不正楕円形を呈し、その規模は径33cm~70cm、検出面からの深さ10cm~32cmを測り、そのうち南桁の方が北桁より浅くなる。また両梁行部分のやや中間に位置する柱穴と北側桁行の柱穴の一部は柱筋からやや外れる。埋土はSB1同様、黒褐色土が堆積している。

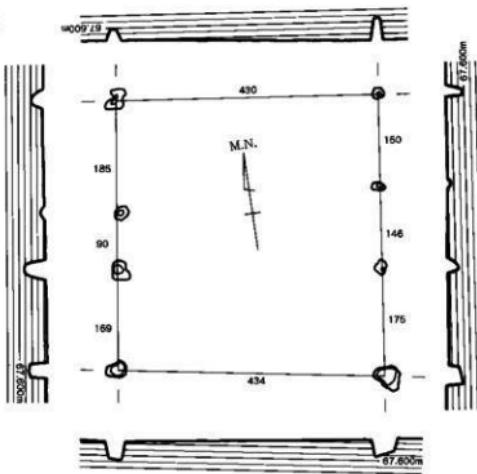
SB3（第26図）

SB3はB区中央に位置し、IVb層上面で検出している。遺構南西側でSB4と切り合い関係にある。建物は1間×2間を呈する長方形となり、梁行は東列が3.35m、西列は2.95mを測り、桁行は北列が5.08m（柱間寸法が東より2.45m+2.63m）、南列が5.1m（柱間寸法が東より2.6m+2.5m）を測る。建物自体の主軸方位はN-12°-Wに採り、SB2と主軸がほぼ一致する。敷地面積は16.2m²である。柱穴の形状はそのほとんどが不正楕円形を呈し、その規模は径30cm~50cm、検出面からの深さ10cm~28cmと一定ではない。また南側桁行部分の中央柱穴が内に入り、柱筋からやや外れている。

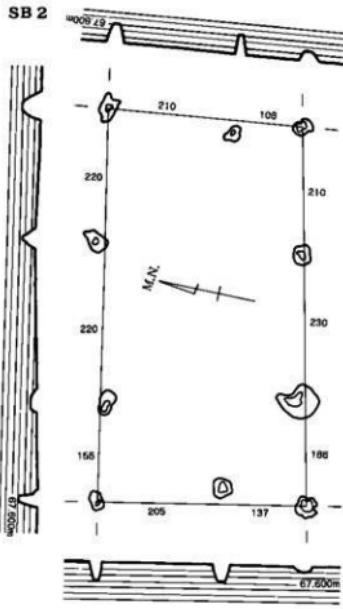
SB4（第27図）

SB4はB区中央に位置し、IVb層上面で検出している。遺構北側でSB3、また南側でSB2

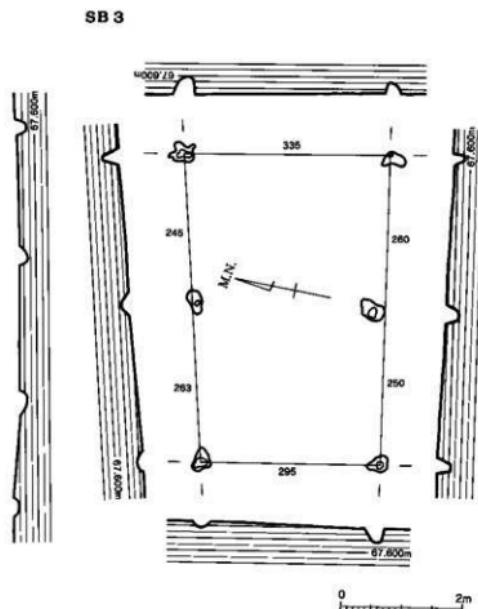
SB 1



SB 2



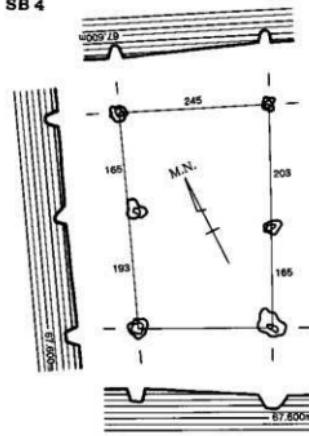
SB 3



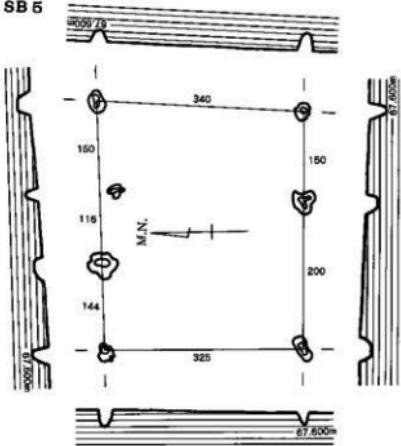
0 2m
Scale bar: 0 to 2 meters

第26図 永ノ原道路 SB 1～3連横実測図 (S=1/80)

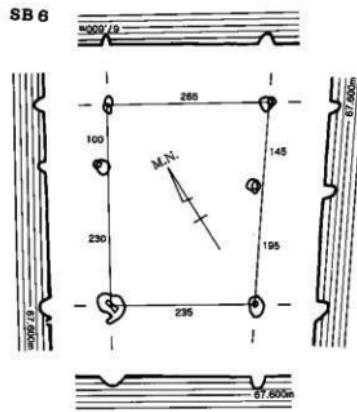
SB 4



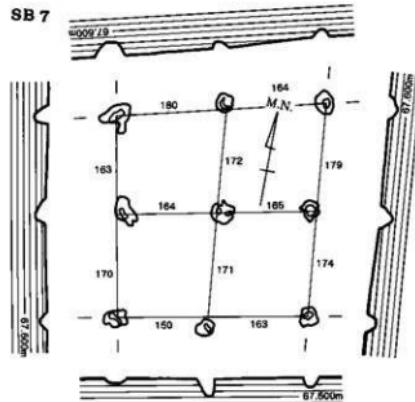
SB 5



SB 6



SB 7



0 2m

第27図 永ノ原遺跡 SB 4~7 連構夷測図 (S=1/80)

・SB5と重複関係にあるが、柱穴の切り合い関係は認められなかった。建物は1間×2間の長方形を呈し、梁行は北列が2.45m、南列は2.2m、桁行は東列が3.58m（柱間寸法は北より1.65m+1.93m）、西列が3.68m（柱間寸法は北より2.03m+1.65m）を測る。建物の主軸はN-26°-Wに採り、敷地面積は8.47m²である。柱穴の形状はそのほとんどが不正橿円形を呈し、その規模は径25cm~50cmでばらつきが認められるが、検出面からの深さ20cm~25cmとほぼ一定である。

SB5（第27図）

SB5はB区中央に位置し、IVb層上面で検出している。遺構西側でSB2・SB3・SB5・SB7と重複関係にあるが、柱穴の切り合いは認められていない。建物の形状は1間×3間を呈する長方形となると思われるが、南側桁行部分で柱穴が1本確認出来なかった。梁行は東列が2.4m、西列は3.25mを測り、桁行は北列が4.1m（柱間寸法は東より1.5m+1.16m+1.44m）、南列が3.95m（柱間寸法は東より1.5m+2.45m）を測る。建物自体の主軸方位はN-0.5°-Eに採り、敷地面積は13.48m²である。柱穴の形状はそのほとんどが不正橿円形を呈し、その規模は径26cm~50cm、検出面からの深さ15cm~28cmと一定ではない。また北側桁行部分の柱穴の1本が内に入り、柱筋からやや外れている。

SB6（第27図）

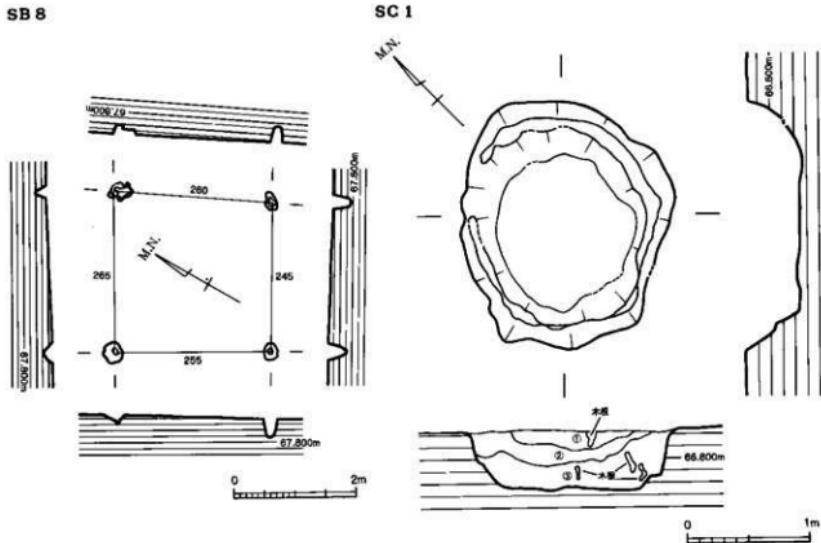
SB6はB区中央に位置し、IVb層上面で検出している。建物群の中では一番南に位置し、SB2より南に2m、SB7より南東に約0.6m離れている。建物の形状は1間×2間の長方形を呈し、梁行は北列が2.65m、南列は2.35mを測り、桁行は東列が3.4m（柱間寸法は北より1.45m+1.95m）、西列が3.3m（柱間寸法は北より1m+2.3m）を測る。建物の主軸はN-30.5°-W、敷地面積は8.47m²を測り、SB4とほぼ同規模である。柱穴の形状は不正橿円形を呈し、その規模は径30cm~48cm一定ではないが、検出面からの深さは一部を除きほぼ15cm前後を測る。また両桁行部分の中央柱穴が柱筋からやや外れている。

SB7（第27図）

SB5はB区中央に位置し、IVb層上面で検出している。遺構北側でSB2・SB5と重複関係にあり、また南東に位置するSB6と隣接する。2間×2間の正方形を呈し、中央にも柱穴を持つ総柱建物跡である。梁行は北列で3.44m（柱間寸法は西より1.8m+1.64m）、南列3.13m（柱間寸法は西より1.5m+1.63m）を測り、桁行は東列が3.53m（柱間寸法は北より1.79m+1.74m）、西列で3.33m（柱間寸法は北より1.63m+1.7m）を測る。主軸方位はN-11.5°-W、敷地面積は11.44m²である。柱穴の形状はそのほとんどが不正橿円形を呈し、その規模は径35cm~55cm、検出面から深さ10cm~30cmである。

SB8（第28図）

SB8はB区中央に位置し、IVb層上面で検出している。建物の形状は1間(m)×1間(m)を方形を呈する。柱間寸法は梁行約2.6m、桁行が2.45m~2.65mを測る。建物自体の主軸方位はN-25°-Eに採り、敷地面積は6.69m²である。柱穴の形状はそのほとんどが不正橿円形を呈し、その規模は径30cm~40cm、検出面からの深さ13cm~32cmと一定ではない。



第28図 永ノ原遺跡 SB8・SC1 遺構実測図 (SB8-S=1/80、SC1-S=1/40)

SC 1 (第28図)

SC 1はA区南側に位置し、北西方向にあるSB 1と隣接する。径20.5m×16.8mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さ約40m、底面積4.32m²を測る。また土坑の中段には、約10cm幅のテラスを有する。遺物は確認されず、砂岩の自然礫が出土したのみであった。埋土は3層（①層：黒褐色土、②層：黒色土、③層：暗褐色土）に分層出来、でレンズ状に堆積している。



(2) 遺物

本遺跡では、今までに挙げた遺物以外に土師皿や土錘（114）等が確認されている。いずれも表土、もしくは攪乱層出土である。そのうち土師皿については小片で磨耗も激しく、固化していない。114の土錘は紡錘形を呈し、胴部中位に最大径をもつ。胴部中位から一端部にかけて欠損しているが、表面は比較的丁寧なナデ調整が認められる。孔径は3.5mmを測る。これらの遺物は古代から中世の所産と推定される。

第29図 永ノ原遺跡 土錘実測図 (S=2/3)

表10 永ノ原遺跡 土錘計測表

番号	出土位置	層位	器種	計測値				色調	胎土	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
114	A区	-	土錘	3.95	1.58	1.58	8.9	浅黄・淡赤橙	塊面な砂粒を含む	一部欠損

第4節 まとめ

永ノ原遺跡では、旧石器時代～古代・中世の長い期間にわたって断続的に利用されていたことが今回の調査で明らかになった。以下、調査の成果を時期別に触れて、まとめとしたい。

旧石器時代では、細石刃・細石核が各1点づつ確認されている。これらの遺物は本来の包含層より、かなり遊離した状態で出土しているが、本遺跡が旧石器時代から利用されていたことを示している。対岸の下星野遺跡でも細石器を主体とする石器群が確認されており、この流域での調査の進展が期待される。

縄文時代では、大きく3時期（早期・前期・後期）が確認されている。そのうち早期では集石構14基とともに土器では前平式土器といった早期前半の段階から後半段階の塞ノ神式土器が出土している。しかし、出土量は少なく、時期別にみてもそれぞれ1～2個体程度でかなり貧弱である。また小型のもので構成されていることも特徴の一つといえる。石器では、石鏃やスクレイパー、二次加工剥片、使用痕剥片、剥片・碎片、石核、凹石、砥石、原石が出土し、そのうち剥片・碎片、石核、原石を除いた利器組成中では石鏃が66.7%を占め、狩猟具が最もも多い比率となる。のことからこの地が、一時的な狩猟等に関わる野営地として生活が営まれていたものと想定される。

弥生時代では、竪穴住居跡が1軒確認されている。しかし第3節でも述べたように削平を受けていたために残りが悪く、また遺物も壺の胴部片や凹石や台石と遺物量が少なく、細かな時期決定が困難である。比較的広い段丘面でありながらも、住居跡形成は単発的なものと推定される。また包含層からは弥生中期～古墳初頭の時期の遺物が少量確認されるに留まった。

時期不明のものでは、竪穴住居跡3軒や掘立柱建物跡8棟、土坑1基がIVb層で確認されている。そのうち竪穴住居跡については、遺物量が少ないとや床面よりかなり浮いた状態で出土しているため時期決定が困難だが、出土した土器片の調整や胎土等の特徴から縄文土器の可能性があり、また包含層（Ⅲ層～IVb層）中で縄文時代前期や後期の遺物が確認されていることから、それらの時期に構築された可能性がある。また掘立柱建物跡については、主軸方位を南北方向にとるもの（SB1・3～8）と東西方向にとるもの（SB2・3）の2種類に大きく分けられ、さらに建物の配置や切り合い関係等により、最低でも4時期に分けられる可能性がある。建物跡の埋土が黒褐色土で構成され、その上層にあたる高原スコリア（12世紀～13世紀）を含んでいないことから少なくともⅢ層中で構築されたものと推定される。また表土中や攪乱土中より土錘や土師皿が確認されていること等から古代の可能性が考えられる。

最後に報告書作成に際し、谷口武範（県文化課）、岩永哲夫・菅付和樹・和田理啓・藤木聰・橋川敬子・松永幸寿（県埋蔵文化財センター）、金丸武司（田野町教育委員会）の各氏をはじめ、多くの方々に御助言・御協力を戴き、記して感謝を申し上げます。

<参考文献>

「猪之様遺跡・留ヶ宇土遺跡」『串間市文化財調査報告書第11集』 串間市教育委員会 1994

田中熊雄「大貫貝塚の研究」『宮崎大学学芸学部紀要4』 宮崎大学 1958

宮崎県史刊行会「宮崎県史 通史編 原始・古代1」1997

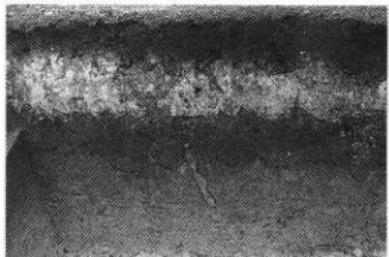
図版1



永ノ原遺跡 遺構（北側上空より）



永ノ原遺跡 遺構（上空より）



A地区土層断面



集石遺構検出作業



S I 2 (南より)



S I 3 (西より)



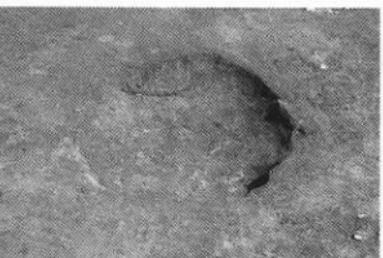
S I 4 (西より)



S I 5 (北より)



S I 6 (南より)



S I 6下土坑 (南より)